

札幌国際芸術祭 2017

事業評価報告書

目次

1 概況	2
2 札幌国際芸術祭基本構想 展開方針における実施状況	4
3 有識者の評	6
4 来場者アンケート	34
5 ボランティア（アンケート結果）	42
6 関係団体（観光、ホテル、ハイヤー）からのヒアリング	48
7 総括	50

【本書の目的】

札幌国際芸術祭 2017 の実施について外部の評価を把握するために、会期中に行った来場者アンケート、閉幕後に行ったボランティア登録者アンケート、国内外の有識者の評、観光業界団体等へのヒアリングをまとめた。その結果を踏まえ、次の芸術祭開催の参考とするための内部検証を行った。

1 概況

札幌国際芸術祭(Sapporo International Art Festival 略称: SIAF^{サイアフ})は、札幌を舞台に3年に一度開催される芸術の祭典である。初回は2014年で、二回目となる2017年は、ゲストディレクターに音楽家の大友良英氏を迎え、8月6日から10月1日までの57日間、市内44会場で、常設の展覧会やイベント、パフォーマンスを実施した。参加アーティストは151組であった。

(1) 来場者数

目標数35万人を上回る、約38万人の来場があった。常設展の来場者数は、モエレ沼公園会場(RE/PLAY/SCAPE)が最も多く約13万7千人、次いで、札幌大通地下ギャラリー500m美術館会場(中崎透×札幌×スキー「シュプールを追いかけて」)5万8千人、札幌市資料館会場(北海道の三至宝、テラコヤーツセンター「土砂」、NMAライブ・ビデオアーカイブ、資料館を拠点としたアートプロジェクト)約4万4千人であった。

来場者の居住地の内訳^{※1}は、札幌市内60.7%、北海道内7.8%、北海道外28.3%、海外3.2%で、前回(2014)と比較すると、市民の割合が約10ポイント増え、逆に、道外からの来場者の割合が減少した。

※1 9会場で実施した来場者アンケートなどから推計

(2) 企画

既存のジャンルに収まらない作品の展示や大小さまざまな音楽ライブ、パフォーマンスのほか、市民参加型のプロジェクトを実施した。また、展示会場は、美術館などの文化施設以外に、市内中心部の雑居ビル、空きビルなども使用した。

今回の芸術祭の全体的な感想について、来場者アンケートでは、約7割が「大変よかった」「よかった」と回答した。

(3) チケット・グッズ

有料の常設展会場^{※2}に何度も入場できるパスポートを今回、初めて導入した。また、多くの札幌市民・北海道民の来場促進を図るため、一般料金より割安な「市民・道民」券を設定した。このほか、有料会場ごとの入場券を販売した。

公式グッズは、メインビジュアルをベースとしたデザインのバッジ、タオル、ノート、クリアファイルなど9品を販売した。

※2 モエレ沼公園、札幌芸術の森、金市館ビル、AGS6・3ビル、北専プラザ佐野ビル、CAI02、北海道教育大学 アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG、JRタワー プラニスホール。なお、これ以外の札幌宮の森美術館、mima 北海道立三好太郎美術館、札幌市円山動物園はSIAFパスポート提示により割引を適用した。

(4) 会場アクセス

会期中の土日・祝日に、JR札幌駅～モエレ沼公園会場(モエレ便)、JR札幌駅～札幌芸術の森会場(芸術の森便)の2ルートの会場連絡バスを運行した。モエレ便は1日4往復、芸術の森便は1日2往復。乗車料金は無料とした(ただし、SIAFパスポートの提示が必要)。

(5) ボランティア

作品設置の補助やイベントなどのサポート活動のほか、ボランティアが自ら考え、実践する主体的な取り組みも行った。参加人数は延べ852人。会期中は、札幌市資料館会場内にボランティアセンターを設置した。

(6) 広報

マスメディアへの情報提供により、パブリシティ実績は822件(新聞246件、テレビ85件、ラジオ118件、雑誌・フリーペーパー82件、ウェブサイト291件)^{※3}であった。

また、ポスター・チラシ・ポストカードを制作した。これらは、掲載内容は同じでデザインが異なるものを多種制作した。

このほか、ノベルティ(ポケットティッシュ、うちわ)の制作、公式ガイドブック販売、公式ウェブサイト、SNS(フェイスブック、ツイッター)での情報発信等を行った。

※3 2015年10月1日～2017年10月31日の期間で、札幌国際芸術祭実行委員会事務局にて、掲載・放送が確認できた件数

(7) 連携

さまざまな団体と、企画・運営協力、広報協力、コラボレーションメニューの提供等を行った。コラボレーションメニューについては、SIAFグルメガイドを発行し市内各所で配布した。

《開催概要》

名称：札幌国際芸術祭2017/ Sapporo International Art Festival 2017 (略称：SIAF^{サイアフ} 2017)

開催期間：2017年8月6日(日)～10月1日(日) 57日間

テーマ：芸術祭ってなんだ？

サブテーマ：ガラクタの星座たち

ゲストディレクター：大友 良英(音楽家)

主な会場：モエレ沼公園、札幌芸術の森、札幌市立大学、札幌大通地下ギャラリー500m美術館、
札幌市資料館、北海道大学総合博物館、mima北海道立三岸好太郎美術館、
札幌宮の森美術館、JRタワープラニスホールほか。計44会場

参加アーティスト：151組

総来場者数：381,697人

1日の最多来場者数：11,335人(2017年9月24日(日))

経済波及効果：48億9,100万円

ボランティア延べ活動人数：852人

パブリシティ効果：3億5千万円

公式ウェブサイト アクセス：365,853件(2016.8.7～2017.10.2)

公式フェイスブック いいね!：8,131件(2017.10.2時点)

投稿数：691件(2014.9.29～2017.10.2)

公式ツイッター フォロワー：5,557人(2017.10.2時点)

ツイート数：3,966件(2014.10.1～2017.10.2)

主催：札幌国際芸術祭実行委員会 / 札幌市

2 札幌国際芸術祭基本構想 展開方針における実施状況

札幌市では、2012年に本市における国際芸術祭開催の基本的な考え方を示す「札幌国際芸術祭基本構想」を策定した。この中で、芸術祭を現代アートの展覧会に加えて、さまざまな祝祭的な要素を盛り込み、芸術に興味のある方々だけでなく、多くの市民や観光客に文化芸術をより身近に感じてもらい、親しみあるものとするため、以下の5つの展開方針(8項目)を設定している。

SIAF2017の事業を展開方針と照らし合わせた該当状況は右表のとおりであり、全項目を網羅できた。

《展開方針》

1 多様な文化芸術分野と複合した世界最先端の現代アート展の実施

- 【1】 絵画、彫刻、インスタレーションなど現代美術を中心にしながら、音楽やパフォーミングアーツなど多様な文化芸術分野と複合した展覧会等を文化芸術関連施設や街中のさまざまなパブリックスペース、自然環境を活用して実施します

※当項目は、SIAF2017全体に該当していることから、右表では、会場が街中のパブリックスペースや自然環境等を活用したものを該当とした。

- 【2】 この芸術祭を通じて、地元アーティストを世界に発信するために、北海道・札幌を地場に活動するアーティストの作品発表の機会を創出します
- 【3】 地場で活動するアートマネージャー等と協働しながら芸術祭を開催することを通して、芸術文化に関わる人材を育成していきます
- 【4】 市民のボランティア活動や滞在型作品制作、ワークショップなどにより、多様な市民参画やアーティストとの交流機会を提供し、市民が札幌国際芸術祭に親しみを持てるようになることを目指します

2 既存の文化事業との連携

- 【5】 札幌市でこれまで実施してきた子どもの美術体験事業「ハロー!ミュージアム」や「おとどけアート」、国際教育音楽祭「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」や国内最大規模のジャズフェスティバルである「サッポロ・シティジャズ」などの音楽イベント、映像コンテンツのマーケット創出を目的に掲げる「札幌国際短編映画祭」など、さまざまな既存の文化事業と連携し、芸術祭の広がりを作ります

3 札幌の魅力を体験する観光イベントとの連携

- 【6】 芸術祭の開催期間中、大通公園等で実施される「さっぽろ夏祭り」や、「オータムフェスト」などの食のイベントと連携を図り、現代アートとあわせて、市民や観光客が札幌の魅力を体験できるものとします

4 民間ギャラリーやアート関連団体との連携による企画展

- 【7】 民間ギャラリーやアート関連団体等による企画展や公募展・アートフェアと連携し、より広がりのある芸術祭を目指します

5 メディアアーツの展開

- 【8】 札幌が有するコンテンツ企業の集積や新しい産業の担い手となるクリエイターの育成施設などの豊富な資源を生かし、デジタル技術と芸術を融合した新しい芸術表現であるメディアアーツを、札幌国際芸術祭の特徴の一つとして展開します

札幌国際芸術祭2017各プログラムにおける実績（[1]～[8]で主に該当するもの）

プログラム	会場	多様な文化芸術分野と複合した 世界最先端の現代アート展の実施				既存の 文化事業 との連携	観光 イベント との連携	アート 関連団体 との連携	メディア アーツの 展開
		[1] 街中、自 然環境等 の活用	[2] 地元 アーティスト 発信	[3] 人材育成	[4] 市民参加、 交流	[5]	[6]	[7]	[8]
常設展									
RE/PLAY/SCAPE	モエレ沼公園		○	○	○				○
NEW LIFE:リブレイのない展覧会	札幌芸術の森			○		○			○
毛利 悠子〈そよぎ またはエコー〉	札幌市立大学 芸術の森キャンパス	○	○	○	○				○
梅田 哲也〈わからないものたち〉	金市館ビル	○	○	○	○				○
梅田 哲也〈りんご〉	りんご	○			○				○
端 聡〈Intention and substance〉	北専プラザ佐野ビル5階	○	○	○					
札幌の三至宝:アートはこれを超えられるか! (レトロスペース坂会館別館、大漁居酒屋でっちゃんサテライト、北海道秘宝館)	北専プラザ佐野ビル地下1階	○	○		○				
DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 (略称:DOMMUNE SAPPORO!)	北専プラザ佐野ビル地下1階、CAI02	○							○
堀尾 寛太〈補間〉	AGS6・3ビル	○			○				○
堀尾 寛太〈テレグラフ〉	藻岩山	○							○
狸小路TV	狸小路商店街、大通すわろうテラス、札幌プラザ2・5	○	○	○	○				○
さわひらき〈うろ・うろ・うろ〉	北海道教育大学 アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG			○	○				
中崎透×札幌×スキー「シュプールを追いかけて」	札幌大通地下ギャラリー 500m 美術館		○	○	○				
札幌デザイン開拓使 サッポロ発のグラフィックデザイン ～栗谷川健一から初音ミクまで～	JRタワー・プラニスホール		○	○	○				
火ノ刺繍 - 「石狩シーツ」の先へ	北海道大学総合博物館							○	○
NMAライブ・ビデオアーカイブ	札幌市資料館			○					
北海道の三至宝:アートはこれを超えられるか! (赤平住友の炭鉱遺産: 坑内模式図、地球の声を聞いた男・三松正夫の昭和火山火山画、 北海道の木彫り熊～山里移コレクションを中心に)	札幌市資料館			○		○			
テラコヤーツセンター「土砂」	札幌市資料館		○	○	○				
札幌市資料館を拠点としたアートプロジェクト(アートトリサーチ センター、サカナ通信、CAMP SITE PROJECT「裏庭」)	札幌市資料館				○				
クワクボリョウタ〈LOST #16〉	札幌市円山動物園	○			○				○
コタンベッププロジェクト	円山公園	○	○		○				
石川直樹展「New Map for North」	札幌宮の森美術館			○	○			○	
ゲストハウス×ギャラリープロジェクト Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」	市内ゲストハウス8カ所	○	○	○	○			○	
OPEN GATE 2017 関連企画「OPEN GATEの部屋」 OPEN GATE archive room 動き続けた展覧会、動き続ける記録たち ～The ever-changing archives of Asian Sounds Research	TOOV cafe/gallery			○				○	
北海道立三岸好太郎美術館 開館50周年記念 特別展 大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音+ 三岸好太郎ワークス 飛び出す事ハ自由ダ	mima 北海道立三岸好太郎美術館		○	○				○	○
プロジェクト(パフォーマンス・ライブ等)									
SIASF2017前夜祭「さっぽろ八月祭2017」	札幌市北3条広場(アカブラ)	○			○		○		
大風呂敷プロジェクト	おどおり大風呂敷工場他	○			○		○		
市電放送局 JOSIAF	札幌市電	○		○	○				
クリスチャン・マークレー+大友良英「Found Objects」	金市館ビル	○							
ノイズ電車 SAPPORO 2017	札幌市電	○	○	○					
DJ盆踊り in さっぽろ夏まつり	大通公園	○					○		
モバイルアースオープン	旭山記念公園「森の家」他	○			○		○	○	
特別協力プログラム マームとジブシー 10th Anniversary Tour (札幌公演)	札幌市教育文化会館			○				○	
I HAVE a DREAM～ひがし町パーカッションアンサンブル	狸小路6丁目 南3条グランドビル前他	○			○		○	○	
妖怪フィギュア・アート・シアター中島公園百物語	札幌市こども人形劇場こくま座前の広場他	○	○	○	○			○	
raprap	扇谷記念スタジオ・シアターZOO		○	○				○	
さっぽろコレクティブ・オーケストラ	札幌コンサートホール Kitara 大ホール				○				
マレウレウ祭り in SIASF2017 ～目指せ100万人のウゴボ大合唱～	札幌芸術の森 野外ステージ		○		○				
Asian Sounds Research Presents OPEN GATE 2017 動き続ける展覧会 ～ An ever-changing exhibition 「何も無いところから」～ start from here	石山緑地	○	○					○	
アジア・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル	札幌芸術の森 大練習室		○		○			○	
指輪ホテル「Rest In Peace,Sapporo ～ひかりの街をはしる星屑～」	札幌市電内他	○		○	○				
NMA Liveー大友良英スペシャル3days	PROVO、くう、ターミナルプラザごとにパトス		○						
クロージングイベント「モエレ沼公園 音楽＆アート解放区」	モエレ沼公園	○	○		○				
ラッピング電車 SIASF 号	札幌市電	○			○				
SIASF2017 オフィシャルバー「出会い」at OYOYO	OYOYO まち×アートセンターさっぽろ				○				
その他									
札幌市内のレストラン、カフェ、BAR、洋菓子店などのコラボ、 オータムフェスト「さっぽろシェフズキッチン」との連携							○		
他イベントや各種団体との広報連携					○	○	○	○	
第68回さっぽろ雪まつり×札幌国際芸術祭2017 トット商店街(プレイベント)		○					○		○
2017冬季アジア札幌大会連携 創造都市発信事業 札幌国際芸術祭2017 アーティスト・プレビュー 平川紀道 (datum) (プレイベント)		○					○		○
SIASF デザインプロジェクト(2016年からの継続プロジェクト)					○				
一緒につくろう芸術祭公募プロジェクト(2016年からの継続プロジェクト)			○	○	○	○		○	

3 有識者の評

学芸員、大学教員、アトラクター、文芸批評家など幅広い分野の12名(うち4名は外国人)の有識者から、「評価できる点」、「改善すべき点」、「次回に向けてのアドバイス」、「自由意見」についての意見をいただいた。

これらの意見について、「芸術祭全体」「企画」「次回に向けて」の視点で分類した。

(1) 有識者一覧(五十音順、アルファベット順)

アマノ タロウ 天野 太郎 氏	横浜市民ギャラリーあざみ野 主席学芸員／札幌国際芸術祭コミッティー	P12
イイダ シホコ 飯田 志保子 氏	インディペンデント・キュレーター／東京藝術大学准教授／ SIAF2014アソシエイト・キュレーター／札幌国際芸術祭コミッティー	P14
クマクラ スミコ 熊倉 純子 氏	東京藝術大学教授(音楽環境創造科・大学院国際芸術創造研究科)	P16
タルミ ヒロノリ 樽見 弘紀 氏	北海学園大学法学部教授(非営利組織論・芸術文化政策論)／ 安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄理事(兼 運営委員)	P17
フジタ ナオヤ 藤田 直哉 氏	文芸批評家	P19
ホンダ ナルシ 細田 成嗣 氏	ライター	P21
ヨシザキ モトアキ 吉崎 元章 氏	札幌市芸術文化財団総務課課長職／一般財団法人地域創造派遣／ 札幌国際芸術祭コミッティー	P23
ヨシモト ミツヒロ 吉本 光宏 氏	ニッセイ基礎研究所 研究理事	P25
アグネシュカ グラツァ Agnieszka Gracza 氏	アトラクター	P27
クレリア ゼルニク Clélia Zernik 氏	パリ国立高等美術学校 芸術哲学教授／美術評論家	P28
デヴィッド ノヴァク David Novak 氏	カリフォルニア大学サンタバーバラ校音楽科准教授	P30
ルーベン キーハン Reuben Keehan 氏	クイーンズランド州立美術館 現代美術館(QAGOMA)アジア現代美術キュレーター	P32

(2) 意見の分類

A 芸術祭全体

全体を通してテーマ「芸術祭ってなんだ？」への一貫性が見られたこと、従来の美術の文脈に収まることのない「音楽と美術のあいだ」というべきユニークな芸術祭だったことが評価された。また、ゲストディレクターの個性やリーダーシップが発揮されたという意見が多数であった。会期中、多数のライブやパフォーマンスを実施したことは、観衆を引きつけたことや、市民を巻き込もうとした姿勢として評価されたが、小さなイベントが多数だったことには、固定ファン以外は情報収集し参加できないという指摘があった。

そのほか、一般的な来場者にとってサブテーマ「ガラタの星座たち」は、少し高度でぼんやりとしすぎたのではないかという意見があった。

今回の芸術祭では、展示会場として、狸小路商店街やすすきの中心部の雑居ビルなどを使用したことが、このことについては、美術館等の文化施設内の展示との対比が際立ち芸術祭としての奥行きが増した、作品内容にある種のゲリラ性が感じられサブテーマとも合致していた、札幌市の魅力を紹介していたという意見があり、評価された。

多数の会場があり分散したことについては、中心部から会場までのアクセスの悪さや、短期間の滞在者には全てを観ることができないという点を指摘されたが、多数の会場を移動することで、札幌のさまざまな側面を体感することができたという意見もあった。

運営面では、市内中心部の会場へのアクセス情報が分かりにくい、外国語対応の不足などが指摘された。

【コメント一例】 ※敬称略

《芸術祭の内容》

- ・ ゲストディレクターの個性が色濃く表れ、テーマへの一貫性が全体を通してみられたことが、他の芸術祭とは異なる特徴を生んでいた。(吉崎)
- ・ ジャンルにとらわれなかった点、ゲストディレクター自らもアーティストとして参画した点、札幌市内広域に会場を点在させたことも特徴的。(天野)
- ・ ゲストディレクターのヴィジョンと指針が明確に表現されていた。SIAFで達成されたのは独自性である。(飯田)
- ・ 本芸術祭開催における大友氏の役割は、コンセプト的にもイベントの段取りに関しても顕著であり、芸術祭全体に同氏の影響が深く表れていた。(Novak)
- ・ 芸術祭全体が従来の美術の文脈には収まりきることのないものとなっていた。「サウンド・アート」という美術の文脈とも異なる「音楽と美術のあいだ」ともいうべきユニークな芸術祭。(細田)
- ・ 「世界の見え方が一変するようなガラクタ」から芸術祭を組み立てることによって、私たちにメッセージを感じ取ってほしいというのが、今回の芸術祭の意図だったとすると、芸術祭全体からそれを感じ取ることができたのではないかな。(吉本)
- ・ 音楽やノイズなど、異なったテーマを持ってきたところは評価に値する。(藤田)
- ・ ゲストディレクターがさまざまなイベントに登場したことが芸術祭全体のまとまり感と市民への親近感を生み、突発的なものを含め、各所でイベントを多発させることで祝祭的な盛り上がりがある程度演出できていた。(吉崎)
- ・ 幅広い音楽関連イベントに重点を置き、広く多くの観衆を引き付けるようデザインされ、地域密着の芸術祭に強い個性を与えている。(Gratza)
- ・ 都市インフラを活用した、意欲的かつ実験的な企画展示も少なくない。(樽見)
- ・ 本芸術祭は、市民や観光客、子どもや高齢者など、あらゆる人を一つにすることを目指しているように思われる。このインクルーシブなコンセプトは非常に重要なものであり、アート界のみを対象とした欧米のビエンナーレ／トリエンナーレのエリート主義的コンセプトとは全く異なっているように感じた。(Zernik)
- ・ 作品は概ねクオリティが高く、札幌の歴史や背景との関連性が感じられるものであり、また、会場の選択もうまく行われていた。ストリートフェスティバルや地域の祭りといった異種文化の要素を取り入れることで、大衆を引きつける力を得た。(Keehan)
- ・ 多数の小さなイベントは、固定ファン以外はフォローし切れないため、映画祭のように短期集中型で大小の事業を集約させるか、あるいは中核をなす固定の主会場の展示会のボリュームを増すなど、今後の検討課題の一つである。(飯田)
- ・ 芸術祭のテーマや内容自体は意欲的だったが、ノイズや星座のような主題は、少し高度ではないかな。(藤田)
- ・ 少しばかり、ゲストディレクターに偏りすぎていたように感じた。サブテーマ「ガラクタの星座たち」も、一般的な来場者にとっては、ぼんやりしすぎていたのではないかな。(Gratza)
- ・ 参加アーティストが一つになり、家族や地域に親しみのあるものがあつたことは高く評価するが、外部には十分に開かれていなかったように思われる。(Zernik)
- ・ 前回の北海道立近代美術館や札幌芸術の森、北海道庁(旧本庁舎)赤れんが庁舎などのずっしりと重く深い展示とは趣を異にして、軽やかでシンプルな構成が今年の特徴と感じた。(熊倉)

《会場》

- ・街中の雑居ビルなどにサイト・スペシフィックな展示が増えたことで、美術館などの文化施設内の展示との対比が際立ち、芸術祭としての奥行きが増した。(飯田)
- ・市街地を使った作品設置は前回よりさらに強化された。ロケーションと設置空間、作品内容にある種のゲリラ性が感じ取られ、「ガラクタの星座たち」というサブテーマとも合致していた。(吉本)
- ・単に会場が点在していたことだけではなく、何らかの形で展示場所、つまり札幌、あるいは北海道という土地性を意識した作品が多く、鑑賞者が街巡りをすると同時に、そうした作品の背景を知ることによって場を意識することができた点は特筆されて良いだろう。(天野)
- ・多数の会場にわたる展開により、来場者は各会場を移動しながら札幌のさまざまな側面を体感することができた。(Keehan)
- ・複数の展示会場が広範囲に点在しているため、短期間しか滞在しない観光客は全てを見ることができず、そのうちのいくつかを選ばなければならなかった。(細田)
- ・中心部からのアクセスが悪い。観光する人は、普段と違う景色に触れる楽しみも期待するのだけれど、途中の風景も特異なものではないのが、退屈さを生んでいる。市電を作品にしたように、移動のバスも作品化したり、映像を見せたりで楽しませることもできるのではないかな。残念ながら観光としてのデザインが悪いとしか言えない。(藤田)
- ・各展示会場が非常に離れていることも多少は来場者の意欲をそぐ要素になりうる。(Zernik)
- ・南区の札幌芸術の森と東区のモエレ沼公園とではいかにも遠隔に過ぎる。ここは「資源(ヒト・カネ・モノ・情報等)の選択と集中」および「芸術祭の脈わい創出」にもっと大胆に舵を切るべきである。いっそ「芸術祭は都心」のみを言い、「周縁は関連イベント」とする、と割り切ってみてはどうか。(樽見)

《運営》

- ・街中のサインやマップには改善の余地があるように思う。確かに目的の建物にたどり着いているのだが、入口や作品までのルートが分かりにくかった。(吉本)
- ・外国人への対応があまり行われなかったことを指摘する。ガイドブックや資料などで英語に翻訳されているのは一部のみであり、サインは読みにくく分かりづらい。(Zernik)

イ 企画

各会場の展示については、展示の質が高いという意見、現代美術を一気に見ることができる構成になっていたのは良かったという点は評価されたが、一会場のボリュームが少なく不満感がある、星を表象する各作品の質は高いが芸術祭全体として星座を体現しきれていなかった、札幌市独自のアートシーンを感じ取ることができなかったという意見があった。

市民参加については、企画事業を公募したことや各種イベントなどから市民を巻き込もうとする意図が感じられたという点が評価された。

国際展ということについては、国際展を目指すのであれば美術展としての見応えもほしい、国際的に知名度のある作品やアーティストが不在のため非常にローカルな地方イベントに参加しているという気分になった、海外からさらに多くのアーティストを迎えるべきという意見があった。

【コメント一例】

《展示・イベント》

- ・なかなか普段見ることができないような建物を大胆に使い、現代美術が一气に見られる構成になっていたのは良かった。しかし、展示のボリュームがそれぞれに少ないので、不満感がある。(藤田)
- ・展示の質は非常に高く、会場自体にとっても独自性があり、また芸術祭の一部として多くのワークショップやパフォーマンスイベントが企画されており、活気に満ち充実したスケジュールを構成していた。(Novak)
- ・「ガラクタの星座たち」に対し、星を表象する各作品の質は高かったものの、芸術祭全体として星座を体現しきれていなかった。(飯田)
- ・札幌市から独自のアート・シーンを感じ取ることができなかった。都市全体としての札幌の魅力を感じることはできたものの、そこに息づくアーティストの魅力があまり前面に出てくることがないように思えた。(細田)
- ・(公演系のプログラムが多かったことは)遠方から訪れる、いわゆる芸術祭とは展示がメインと思い込んでいる観客には、今回の芸術祭の貴重な妙を味わうことは難しかったのかもしれない。(熊倉)

《市民参加》

- ・前回の芸術祭と比べ市民参加を飛躍させられた。(飯田)
- ・企画チームに地元からも多く加えたことや、広くプロジェクトを募り正式プログラムにしたこと、コンサートや演劇などへの市民参加の機会や大風呂敷プロジェクトでボランティアの活動の場をつくったことなど、前回とは異なり、強く地元を意識し、市民を巻き込もうとする意図が感じられた。(吉崎)
- ・オーケストラや演劇、大風呂敷プロジェクトなどに積極的に参加した人達は充実した時間を過ごしたようだが、その気持ちが熱いほど、それ以外の人との乖離が生まれているように感じた。(吉崎)

《国際展》

- ・非常にローカルな地方イベントに参加しているという気分になるのは、おそらく国際的に知名度のある作品やアーティストが不在だからであろう。大勢の来場者と外国人を引き付けるため、次回は国際的知名度の高いアート作品を1、2点展示することを推奨する。クリスチャン・マークレーや大友良英は非常に有名な国際的アーティストであるが、専門家ではない一般的な来場者にとってはやや特殊に感じたかもしれない。(Zernik)
- ・真の国際フェスティバルにするには、海外からさらに多くのアーティストを迎えるべき。(Gratza)
- ・国際展を目指すのであれば、美術展としての見応えもさらに求めたい。(飯田)
- ・SIAFの課題は、本芸術祭の文脈において最も意味のある国際性の担保を模索しながら、刷新と継続のバランスをうまくとっていくことである。(Keehan)

ウ 次回に向けて

芸術祭の開催意義については、市民に何を提供し、地域にとってどのような役割を担うのかを明確にする必要があるという意見、テーマについては、北海道・札幌という特異な地域固有の歴史を提示することにより、全世界のさまざまな「近代」の問題を抱えている地域と連携できるのではないかという意見、芸術祭に特徴を与えるには、現在の芸術祭の文脈にどのように作用するのかという問いに立ち返ると、重要なのは札幌と北海道の背景に焦点を置くことという意見があった。

また、芸術祭は、鑑賞者に新たな気づきや思索を促し、現代社会に対する新たな見方、時には批評的な思考を提供することに意義があるという意見があった。

芸術祭を成長させていくためには、市民による継続したクリエイティブ活動のネットワーク、地元の芸術関係者が受け皿としての能力を高めること、ボトムアップの市民力に勝る原動力はないというような、継続した市民参加の必要性についての意見があった。

【コメント一例】

《開催意義》

- ・ 3年に一度、大きな予算と規模で行うことができる芸術祭が、札幌の文化に何をプラスしていけるかを考えると、他の機会では得難い先進的で刺激的な思い切った方針で行う重要性を感じる。独自性による北海道外からの注目度も然ることながら、札幌にいかに根付かせていけるかも大切にしてほしい。(吉崎)
- ・ 都市型(の芸術祭)の場合、さまざまな文化施設が整備され、日常的に数多くの文化事業が行われている中で、芸術祭は市民に何を提供し、地域にとってどのような役割を担うのか。そのことを里山型(の芸術祭)以上に明確にする必要があるだろう。市が主導する文化イベントが他都市と比較しても充実している札幌の場合はなおさらだ。(吉本)
- ・ 見る人に新たな気づきや思索を促し、現代社会に対する新たな見方、時には批評的な思考を提供することに、芸術祭の少なからぬ意義がある。(吉本)

《テーマ・キュレーション》

- ・ 一見負に見えるテーマであっても、世界的な潮流としては、むしろ取り上げるべき題材とされていることが多い。それらの「近代」の問題系を問うことで、北海道・札幌という特異な地域固有の歴史を提示し、そのことによって全世界のさまざまな「近代」の問題を抱えている地域と連帯し、連携できるのではないか。(藤田)
- ・ 芸術祭に特徴を与えるものは何か、またそれは現在の芸術祭の文脈にどのように作用するのかという問いに立ち返ると、重要なのは札幌と北海道の背景に焦点を置くことであると言える。(Keehan)
- ・ 芸術ならではのアプローチで都市に未知の価値を与え、社会的な課題に新鮮な切り口を突きつけるような芸術祭こそ、創造都市には求められている。(吉本)
- ・ 既存の美術館や公共施設といった、いわゆるハコモノに固執しない芸術祭の「新しいハコ」の在り方の発見に向けた、発想の転換とアイデア出しをさらに加速すべき。(樽見)

- ・ 家族的なあたたかな雰囲気や、この芸術祭にエネルギーを与えている社会的・協働的な側面は残す必要がある。作品の気品、地域の歴史、そして芸術祭そのものが持つコミュニケーションを生み出す力を保ちつつ、さらに目を引くようなメジャーなイメージを加えていくことも必要であろう。(Zernik)
- ・ SIAFは“アート”フェスティバルとして、さらに洗練されたキュレーションによるアプローチや、今日的意味があり、かつ、タイムリーであるテーマの選択により、メリットが得られるのではないだろうか。(Gratza)
- ・ (ゲストディレクターについては)美術専門家とそれ以外の共同ディレクター制も一考の余地がある。運営に関しては、事業数と会場数を減らし、SIAFの持続可能性を担保するべきである。(飯田)

《市民参加》

- ・ ボトムアップの市民力に勝る原動力はない。どのような市民、市民力を必要としているか、を精査することが肝要かと思う。(樽見)
- ・ 長い時間をかけなければその成果が出てこないようなワークショップ・イベントも複数開催されていた。そうしたイベント参加者たちが3年後にどのような成果を見せるのか、こうした側面を次回の芸術祭と連関させていくことが期待される。(細田)
- ・ 芸術祭が長続きする長期的価値を生み出すのは、市民による継続したクリエイティブ活動のネットワークであり、それにより市民と外からの来場者の両方が、札幌は開かれたアートと文化の街であるとの認識を持つのである。力強いアートコミュニティの育成のため、芸術祭開催年以外においてもアートプロジェクトを継続支援していくべきである。(Novak)
- ・ 一度に多くの市民を引き込むことは困難であり、少しずつ広げていくしかないが、少しでも多くの人に興味や関心をもってもらふ工夫とともに、それらの人が来やすい、入りやすい環境や雰囲気づくりを心掛ける必要があろう。(吉崎)
- ・ ディレクターも事務局担当者たちも変わるシステムで、芸術祭をどう成長させていくのか?鍵となるのは地元の芸術関係者が受け皿としての能力を高め、毎回の経験を継続・発展させることに尽きる。(熊倉)

《その他》

- ・ 主会場のないことを利点として大いに生かすことが次回展への大きな枠組みと考える。これは一方で、運営に大きな負担をかけること、また作家の選定、展示といったキュレトリアルな側面をより強化する必要を迫られる。(天野)
- ・ 「今後SIAFが国際性をどのくらい重要視するか」という点で、原点に立ち返り、「国際芸術祭」としての発展を探索してもらいたい。(飯田)
- ・ 海外の芸術祭に比して、とかく多言語性や同時性の面で遅れの目立つ日本の芸術祭の常を超克するなんらかの方法論を手にすることで、国内でも突出した国際性をもつ芸術祭となりたい。(樽見)
- ・ 「都心の芸術祭」の「賑わい」をより効果的に演出するためには、参加者が効率的かつダイナミックに地上を平行移動する(できる)必要がある。(樽見)
- ・ 芸術ファンだけを当て込むのでは、芸術ファンすら見向きもしない。むしろ、芸術の輪郭を改変し、拡張していく創造性こそ、目の肥えた美術ファンを振り向かせるし、芸術に興味のなかった多くの人々を巻き込んでいくことになるはずである。(藤田)

札幌国際芸術祭2017の評価

芸術・観光・運営のバランスをどう取るか？

天野 太郎

横浜市民ギャラリーあざみ野 主席学芸員／札幌国際芸術祭コミッティー

総評

今回のSIAF2017は、大友良英ゲストディレクターのもと開催された。ジャンル(アートや音楽など)にとらわれなかった点、ディレクター自らもアーティストとして参画した点、それから札幌市内とはいえ、広域に会場を点在させたことも特徴的だった。何よりもディレクターの存在が全面に押し出された芸術祭は他に類を見ないだろう。大友自身のパフォーマンスをはじめ、mima 北海道立三好太郎美術館での大友クロニクルの展示も好評だった。そもそも大友氏自身が札幌との縁があったことも幸いした。

また、単に会場が点在していたことだけではなく、何らかの形で展示場所、つまり札幌、あるいは北海道という土地性を意識した作品が多く、鑑賞者が街巡りをすると同時に、そうした作品の背景を知ることによって場を意識することができた点は特筆されて良いだろう。ことさら世界的な視野に立つのではなく、表現者と場とのリアリティが鑑賞者と共有できた点も評価されるべきだろう。数年前であればこうした傾向は、ローカル性として決して肯定的には評価されなかったが、世界の枠組みが破綻して以降、民族やその住まう地の単位がかりうじて価値を共有できる最小単位になった現在、意義ある構成だったと思われる。

改めてSIAFの特徴でもあり、同時に欠点でもある主会場を持っていないことについて指摘しておきたい。これは、同芸術祭開催前から筆者より指摘してきた課題で、収入面(愛知や横浜のように主会場をまず見るために入場券を買わざるを得ない)に深刻な問題を抱えること、会場の分散化が鑑賞者の移動に負担をかけることなどが挙げられる。一方で、こうしたネガティブな点を除けば、否応なく市内を移動せざるを得ないことからとりわけ道外の鑑賞者にとってはこれまで知ることができなかった札幌や北海道についての発見を得る機会が増える点は評価すべきだろう。実際に、主会場を抱える国際展は、主会場の入場者の60～70%が他会場へ移動していることが判明していることから、良くも悪くも主会場で満足してしまう傾向がある。また自治体にとってこういった国際展の役割の一つに観光資源になり得るかどうかが、あるいは機能しているかどうかが大きな関心となっている。こうした点に立てば、さまざまな会場を周遊せざるを得ない状況は逆手に取れば周遊観光へとつながる利点でもある。

会場構成、作品など

屋外作品(前回の札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)や島袋道浩氏の石、札幌市資料館裏のコロガル公園など)が少なかった代わりに屋内、それも日頃足を踏み込むことのない場が選ばれたのは、スペクタクル感に乏しかったとはいえ、場と作品を合わせた新たな発見ができた。札幌市立大学は、清家清建築が堪能でき、かつ場を巧みに活用した毛利悠子作品、さわひらきのHUG、クワクポリョウタのCAI02、円山動物園の展示も広い意味でサイト・スペシフィックな作品として好評だった。HUGとサッポロファクトリー、OYOYOとスープカレー店、すすきの展示など、とりわけ道外からの参加者にとって美術と食の接近は良かった、という意見多し。

広報面

ガイドブックに各会場の住所がなかった(地図のみ)。地図も読みづらい。地上でビルを探すのが分かりにくい。一方で、地下鉄改札を出たあとの地上地図には、乗降口番号もあり分かりやすく、市営地下鉄の協力が大きい。駅での露出度やデジタルサイネージ、チ・カ・ホなどで目立っていた。これは、市電のラッピングなどに芸術祭カラーを効果的に示した。

会場時間

時間帯が複数あることをどう伝えるか。時間差で時間を無駄にせず作品を見て回ることができるといふ点、会社帰りに見られるなど、の利点を生かすべき。

スタンプラリー

全部見てみようという気になり、札幌市内を回遊するのは、スタンプラリー好きには好評だった。会期中に発生した台風18号の影響で、公共施設(大学含む)や屋外が展示中止になったが、その案内を札幌駅にあるインフォやホームページ、SNSを通じて告知した対応は良かった。

受付、監視

有償アルバイトが受付などをしていたということで対応はとても丁寧であったという感想が多く聞けた。実例として、チケットを落として次の展示へ行ったとき一つ前の展示の場所に連絡して確認してくれるなどテキパキとした対応で非常に好感を持ちました、という声あり。

パンフレット

構成が見にくかった、という指摘が多かった。後改訂されたものの、当初、場所の住所が入っていなかったのは地元住民ですら不便を感じたという意見が多かった。紙媒体では止むを得ないが、期間限定展示やイベントが終わっているのが一緒になっていることで、情報の混線があったようだ。少なくともホームページなどで情報のアップデートを見やすい形で紹介する必要があると感じた。

移動手段

モエレ沼公園と札幌芸術の森以外は、えきチャリさっぽろは有効な手段であったようだ。朝6時から24時まで借りて500円というのも良かった。借りている外国の方が多く、受付の対応は好評であったと聞くことが多かった。

次回開催に向けての アドバイス

今後の開催時期について、8月スタートは夏休み時期と重なり、宿も高い。一方で、シェアハウス、Airbnbなど使った旅にできれば家族でゆっくり来たいという意見が多く聞かれた。宿泊施設のインフラづくりが急がれる。また、開催時期の冬の可能性についてであるが、広域の展示が見込まれる中、雪に不慣れな道外の観客にとっては負担が大きいのと思われる。長期の夏休み中の、これからますます増加するインバウンドの観光客も含めた取り込みは当分継続すべきと考える。

また、既述したが、主会場のないことを利点として大いに生かすことが次回展への大きな枠組みと考える。これは一方で、運営に大きな負担をかけること、また作家の選定、展示といったキュレトリアルな側面をより強化する必要を迫られる。これもすでに何度も事務局に提案してきた点であるが、事務局を札幌市芸術文化財団に移管し、継続的な組織づくりに着手すべきである。事務局長など市とのパイプ役には市役所からの人材が必要であるが、上記のような人的な育成を行うにはこの手段しか見当たらない。早期の着手が望まれる。

典型化された美術の規範の狭小さを打ち破る芸術祭

飯田 志保子

インディペンデント・キュレーター／東京藝術大学准教授／SIAF2014アソシエイト・キュレーター／札幌国際芸術祭コミッティー

評価できる点

音楽と美術の領域を融合した実践を行うアーティストの参加と、さまざまな市民参加事業によって、大友ゲストディレクターのSIAF2017に対するヴィジョンと指針が明確に表現されたこと。芸術監督制を敷く上で最も肝心なのは、監督の声が市民、来場者、ステークホルダーに対して明確に伝わることである。徹頭徹尾「市民のための芸術祭」にしようとした姿勢と、良い意味でアーティスト選定に偏りがあったことが、SIAF2017の特性を強調した。視覚芸術よりも、視聴覚ならびに身体表現を伴った全身で体感する作品、ワークショップ形式で一過性ではない深い参加経験を得られるプロジェクトが多くを占め、典型化された美術の規範の狭小さを打ち破る芸術祭となった。また、鑑賞/体感/参加する作品のみならず、札幌の文化史を個人の視点で語り直す主観的なアーカイヴ展示もいくつかバランスよく組み込まれ、芸術祭という大きな枠組みを借りながら、そのアジェンダに対するアンチテーゼやオルタナティブであろうとするゲストディレクターの一貫した姿勢が強く前景化された。こうした挑戦的な試みを可能にしたのは、ひとえに各作品のクオリティの高さと、それを実現したスタッフの尽力である。さらに、街中の雑居ビルや市内の建物におけるサイト・スペシフィックな展示が増えたことで、美術館や資料館といった文化施設内の展示との対比が際立ち、芸術祭としての奥行きが増したことも評価される。SIAF2014でも会場の一つであったモエレ沼公園をコンセプトの中核に据えたことで、札幌市内広域の魅力のアピールや観光資源紹介に貢献した。SIAF2014での経験と反省点が生かされ、十分に達成できなかった市民参加を飛躍させられたのは今回最も重要な評価点である。デザインも機能性・可読性ともに高く、効果的であった。

改善すべき点

上記の評価点を逆の視点から見たものが改善点となるだろう。コンセプトの「ガラタの星座たち」に対し、星を表象する各作品の質は高かったものの、芸術祭全体として星座を体現しきれていなかった点。芸術祭としては総合的に評価できるが、今後SIAFが国際展を目指すのであれば、美術展としての見応えもさらに求めたい。会場数とイベント数の多さは評価点・改善点のどちらにもなるが、それらがキュレーションされた展覧会なしに市内に多数点在することは散逸感を招く。会期中を通して動きや変化が起こり続けることは望ましい一方、多数の小さなイベントは、固定ファン以外にはフォローしきれないため、映画祭のように短期集中型で大小の事業を集約させるか、あるいは中核をなす固定の主会場の展覧会のボリュームを増すなど、今後の検討課題の一つである。また運営面においても、事務局の規模と人材に見合った事業数と組織体制への改善が求められる。国際性については、今回札幌市民のSIAFの認知と参加意識は向上したと思われるが、少なくとも現代美術領域における国際的な認知度は向上していないため、今後SIAFが国際性をどのくらい重視するかに応じて検討が要される。場合によっては市の基本構想にメスを入れ、「札幌芸術祭」に舵を切る大転換を図ることも検討する意義があるかもしれない。

次回開催に向けての アドバイス ～「独自性」と「継続性」の 観点から

SIAF2017で達成されたのは独自性である。芸術祭が乱立するなかで独自性を打ち出すのは極めて難しいことであるから、今回を一つの成功モデルとし、次回以降も美術専門家ではないゲストディレクターを選定していくことを試みても良いかもしれない。ただし、美術専門家以外のゲストディレクターの起用については美術関係者から批判の声も少なくないため、美術専門家とそれ以外の共同ディレクター制も一考の余地がある。運営に関しては、事業数と会場数を減らし、SIAFの持続可能性を担保するべきである。ゲストディレクターの熱意とコミットメントは何より重要だが、主催者の規模を鑑み、事業の枠組みは事務局でしっかり手綱を握るべきではないだろうか。

自由意見

SIAFは国内では数少ないボトムアップで創始された芸術祭であることに立ち返ると、改めて「市民」と「同時代の美術」の要素が重要であると思う。この二大要素は、事業主体や予算規模に拠らず、芸術祭を行う意思と展望があるところではどこでも実現されることが、世界の多様なビエンナーレにおいても確認できる。札幌の場合、1970年代から地元の現代美術家が手弁当で国際交流を含む先行事業を行ってきた実績もあるため、行政としてサポートすべきは「市民」と「同時代の美術」を持続可能にする枠組み(＝芸術祭)を作ること、そして特に個人では継続が難しい「国際」の部分に注力すべきではないかと思う。上記の「改善点」では「札幌芸術祭」への大転換も一案として提案したが、「今後SIAFが国際性をどのくらい重要視するか」という点で、原点に立ち返り、「国際芸術祭」としての発展を探究してもらいたいと私は考える。それが札幌で芸術祭を創始した理由の一つではなかっただろうか。

芸術祭を育てる、ということーさらなる広がりに向けて

熊倉 純子

東京藝術大学教授(音楽環境創造科・大学院国際芸術創造研究科)

展示はおおむね見る事ができたように思いますが、その中で特に見応えがあったのが、毛利悠子・堀尾寛太・梅田哲也の3人の作品です。レジデンスの成果が功を奏し、時間をかけて構想し作り込まれたインスタレーションは、遠方からの来場者をも「旅のかいがあった」と満足させてくれる充実したものでした。モエレ沼公園の展示も、招待作家たちの作品の中に大友作品が散りばめられ、招待作家たちの作品群をつなげるアクセントとして機能しているようでもあり、はたまた大友さんが招待作家たちを包み込んで迎えているようもあり、展示室から展示室へとわくわくする回遊体験を提供していたと思います。札幌芸術の森美術館の展覧会はシンプルなコンセプトですが、音楽と現代美術の接点を示した点で、札幌の音楽好きの若者たちに大きな示唆を与えてくれたのではないのでしょうか？前回の北海道立近代美術館や札幌芸術の森、北海道庁赤レンガが庁舎などのずっしりと重く深い展示とは趣を異にして、軽やかでシンプルな構成が今年の特徴なのかなと感じました。

しかし、展示もさることながら、ミュージシャンである大友さんの真骨頂は、数々のライブ・パフォーマンス企画に表れていた可能性もあります。特に、街中に解き放たれた若手ミュージシャンたちと遭遇できたら、きっと忘れえぬ体験となったと思います。また、大友さんの人脈で、札幌に長く脈々と受け継がれていたマイナーな音楽系の活動に光が当てられたことも、歴史的に大きな意味があったはずで。残念ながら、私自身は短い滞在の中、効率よく(日本文化政策学会の)バスツアーで展示を回った反面、公演系のプログラムはまったく見る事が叶わず、札幌在住の方々がうらやましく感じました。遠方から訪れる、いわゆる芸術祭とは展示がメインと思い込んでいる観客には、今回の芸術祭の貴重な妙を味わうことは難しかったのかもしれない。

転じて、運営系はどうだったのでしょうか？前回同様、SIAF運営チームの密なチームワークが随所に感じられました。ディレクターである大友さんの哲学と「ビッグバンドのような運営チーム」というフラットな運営方針は、今後の日本の芸術祭にとって重要な示唆に富むものです。ぜひとも今後も札幌にその哲学が根付いていくことを望みます。札幌市役所の事務局もー大友さんには、きっと何度も叱られたと思いますがー前回同様、全国有数の熱意と柔軟性で取り組まれているように拝察いたしました。

ただ、一点懸念を抱いたのは、準備期間を含めて札幌市内の芸術関係者の反応が薄かったことです。「いま、なにがどうなっているのか、まったく見えない」という声をよく耳にしました。「市役所による、市役所の芸術祭」などというふうに、思われてはいないのでしょうか？財団、大学、NPOやアーティストたちなど、皆さんがもっと芸術祭に参画をして、オール札幌で汗をかいて楽しみ、皆が成長する機会になると、より素晴らしいと思います。毎回、ディレクターも事務局担当者たちも変わるシステムで、芸術祭をどう成長させていくのか？前回の評価報告書にも書かせていただきましたが、鍵となるのは地元の芸術関係者が受け皿としての能力を高め、毎回の経験を継続・発展させることに尽きると思います。次回の運営面での盛り上がりさらなる期待をしております。

資源の選択と集中でよりいっそう賑わいの創出を

樽見 弘紀

北海学園大学法学部教授(非営利組織論・芸術文化政策論)／
安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄理事(兼 運営委員)

評価できる点

- ・実行委員会と市役所の担当部局連携による周知な準備と実施体制は、トリエンナーレ形式開催であることの利点をいかんなく発揮している。
- ・名声・実績・能力、いずれにも優れた総合ディレクター(前回の坂本龍一氏、今回の大友良英氏)をつかまえ得ている。
- ・芸術祭の一連のフェーズ(起案、計画、実行、評価等々)において、歴代の首長(上田前市長、秋元現市長)が十全にリーダーシップを発揮している。
- ・都市インフラを活用した、意欲的かつ実験的な企画展示も少なくない。
※SIAF2017における路面電車利用のパフォーマンスなどはとても興味深かった。
- ・とまれ、トリエンナーレの「2回目」を見事、やり遂げたその事実!

改善すべき点

現在の拡散型 / 分散型開催方式から圧縮型 / 稠密型開催方式への転換(提案1)

南区の札幌芸術の森と東区のモエレ沼公園とではいかにも遠隔に過ぎる。札幌駅前通 / 札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)をウェルカムゲートと規定することには大いに賛同するが、残念ながら、期間中、その基幹たる「ゲート」からして賑わいが感じられなかった。自治体施設としての札幌芸術の森エリア(札幌市立大学を含む)やモエレ沼公園エリアなどを大事にしたい市役所の気持ちはある程度理解するが、ここは「資源(ヒト・カネ・モノ・情報など)の選択と集中」および「芸術祭の賑わい創出」にもっと大胆に舵を切るべきである。いっそ「芸術祭は都心」のみを言い、「周縁は関連イベント」とする、と割り切ってみてはどうか。

芸術祭開催期間中の路面電車・ペロタクシー・シェアサイクルなど、重層的な地上移動手段の十全な活用(提案2)

前述の「都心の芸術祭」の「賑わい」をより効果的に演出するためには、参加者が効率的かつダイナミックに地上を平行移動する(できる)必要がある。地下鉄やバスももちろん一定の役割を担うが、ループ化になった路面電車や、ドイツ起源のペロタクシー(人力タクシー)、中国からの進出を果たしたモバイク(シェアサイクル)など、ここへ来て面白い展開・充実をみせている札幌の多様な地上移動手段網を重層的に活用しない手はない。人々の「呼吸するように街をめぐる」の実現に注力すべき。期間中、物理的にも、金銭的にも、また、心理的にも地上移動手段の選択肢を増やすこと、また異なる交通手段相互の連関を図ることが、そのまま芸術祭の魅力を増し、また、魅力に満ちた札幌の都市景観を世界に発信することにもつながるものと思う。

次回開催に向けての アドバイス (「自由意見」を含む)

ハコは街にある

(前回、今回の2回の芸術祭ですでにその端緒は開かれているが)既存の美術館や公共施設といった、いわゆるハコモノに固執しない芸術祭の「新しいハコ」の在り方の発見に向けた、発想の転換とアイデア出しをさらに加速すべき。とりわけ、商業ビル、ホテル、学校、カフェ、商店、商店街、民家、民家の蔵などの活用方法をもっと発見・発掘したい。
※規模ははるかに小さいが、例えば、神奈川県葉山芸術祭などはアイデアの宝庫としてとても参考になると思われる。

肝はカネになる

芸術祭隆盛のカギは、その実、作品取引のショーケース機能にある(と僕は信じて疑わない)。税金由来の自治体予算(＝他人のカネ)で、企画(＝魅力)を広告代理店や総合ディレクター(＝他

人のちから)に丸投げするのではなく、早く市民ベースのみならず経済ベースでも「自発する芸術祭」たり得るフェーズに上がるべき。世界の名だたる芸術祭では、実は、裏で、あるいは周縁で暗躍する(?)キュレーターや画廊や画商の情報交換活動や、場合によってはリアルな商取引が重要であることは一定程度常識であると思う。同時に、芸術祭開催期間中、ホテルや商業施設などが経済的に潤った、という成功体験もあなどれない。短期的に、あるいは中長期的に「SIAFはカネが動く」も、実は大切な到達目標ではないだろうか。

とはいえヒトが真ん中

さはさりながら、前提条件としてベネッセも安藤忠雄も持たないSIAFにとって、やはりボトムアップの市民力に勝る原動力はない。とはいえ、「市民」はともすると「烏合の衆」の別称でもある。どのような市民、市民力を必要としているか、を精査することが肝要かと思う。以下、瀬戸内国際芸術祭との対比で、求められる市民像を列記してみたいと思う。

前提条件(まちそのものの魅力)

瀬戸内: 何もないところに芸術祭のアイデアが降臨→自発する「こえび隊」などの市民力(当然と言えば当然)

札幌: 一通り何でもあるまちに降って湧いた芸術祭=さまざまな都市の魅力の one of them →市民は忙しいので市役所任せ(当然と言えば当然)

旅の起点としての芸術祭 vs. 旅の終点としての芸術祭

瀬戸内: 狭い、何もない島々に芸術祭を「目的(終点)」とする人々が集中する→外形的には成功。

その実、不平不満は潜在的にある→芸術祭訪問のフェスの成功

札幌: 広い、都市機能も整った街の芸術祭を「理由の一つ(起点)」に人々がまちに散在する→外形的には失敗。その実、旅の満足度はある程度確保される→芸術祭訪問の総花的成功

【芸術祭単体としての評価は、フェスの成功>総花的成功、となりがち?】

SIAFの真ん中たる市民/市民力像

- ・市民の代表たる「市長」のもっと顔の見える芸術祭: 例えば、海外の芸術祭(パリなど)では、市長招聘作家として世界各地から、未だあまり光の当たっていない作家の「個展」などが開催される。「市長招聘」をSIAFの一つの目玉企画に仕立てられないか。
- ・「心の札幌市民」も参加できる芸術祭: 札幌は冬季オリンピック(1972年)やビール、ラーメンなどを通して日本有数の国際ブランド力を持つ都市である。札幌に住まわずとも、札幌を愛し、いつか札幌への旅行/移住などを祈念する人々を「心の札幌市民」として遇するSIAFへの特別参加のかたちを工夫したい。
- ・世界中の作家や作品が活発に売り買いされる芸術祭: アート作品は室内装飾の身近なアイテムとして、あるいは割のいい(?)投資/投機の対象としてかつてない裾野の広がりを見せる。SIAF開催期間中に全国/全世界のアートの売り手と買い手がプロ・アマを問わず札幌に集結する、というシーン、すなわちショーケースの賑わいを創出したい。
- ・マイノリティーのための芸術祭: アールブリュットや先住民アートなど、既成概念に捉われない新しいアートの発信地機能を強化できないか。
- ・多言語・マルチメディアで同時発信される芸術祭: 海外の芸術祭に比して、とかく多言語性や同時性の面で遅れの目立つ日本の芸術祭の常を超克するなんらかの方法論を手にすることで、国内でも突出した国際性をもつ芸術祭となりたい。

まずは芸術祭の面白さを市民に体感させて

藤田 直哉

文芸批評家

評価できる点

他の芸術祭と比較し、音楽やノイズなど、異なったテーマを持ってきたところは評価に値する。木彫りの熊などの民芸品に着目した展示も良かった。「ゴミ」など、一見したところネガティブに捉えられかねないテーマを持ってきたところも良い。メディアアートを全面に出す創造都市であり、同時に自然で知られる北海道であるので、そこを推し出す点も悪くはないと思う。作品で良かったのは、中心市街の作品群。なかなか普段見れないような建物を大胆に使い、現代美術が一気に見られる構成になっていたのは良かった。

改善すべき点

全体的に、盛り上がっていない。集客に問題がある。地元の人々の当事者意識も低い。それは、札幌の文化的な土壌の問題もあるのかもしれないが、越後妻有や瀬戸内のような、地域を巻き込んだ芸術祭の作り方に比べると寂しい(旅行者は、住人との触れ合いも楽しむものである)。地域への影響や効果も薄いのではないか。これも北海道特有の問題だと思われるが、あらゆるものが遠くて交通の便が悪い。札幌芸術の森とモエレ沼公園は、それぞれに素晴らしい場所なんだけど、中心部からのアクセスが悪い。観光する人は、普段と違う景色に触れる楽しみも期待するのだけど、途中の風景も特異なものではないのが、退屈さを生んでいる。市電を作品にしたように、移動のバスも作品化したり、映像を見せたりで楽しませることもできるのではないかな。さらに、展示のボリュームがそれぞれに少ないので、不満感がある。例えば、モエレ沼公園をもっと全体的に使って、今の20倍ぐらいの作品があっても良かったのではないかな(若い地元のアーティストや学生らに参加してもらって)。残念ながら観光としてのデザインが悪いといえないう。

次回開催に向けてのアドバイス

SIAF2017のテーマや内容自体は意欲的だったが、しかし、ノイズや星座のような主題は、少し高度ではないか。実はそこにはないようであるという「ノイズ」の鑑賞方法は、むしろ通常のスペクタクルな芸術に対する反省や批評として存在するのであって、そもそもスペクタクル的な「現代美術」それ自体の経験があまり豊かではない札幌は、それが機能する手前にあるのではないだろうか。まずは派手で直観的な現代美術で圧倒して市民を芸術に巻き込む方が先では。歴史や伝統がある地域と比べて、北海道は不利な点もあるし、有利な点もある。やはり、伝統的な地域では地域資源が多いし、住民の積極的な意識なり社会関係資本なりがある。その点では明らかに不利なのだけれど、新しい設計都市であることを生かしたり、近代(開拓)に固有の問題系が集約されているという点では、面白い場所でもある。炭鉱(エネルギー開発)やアイヌの虐殺など、一見負に見えるテーマであっても、世界的な潮流としては、むしろ取り上げるべき題材とされていることが多い。それらの「近代」の問題系を問うことで、北海道・札幌という特異な地域固有の歴史を提示し、そのことによって全世界のさまざまな「近代」の問題を抱えている地域と連帯し、連携できるのではないかな。むしろそれこそが、日本の芸術祭や地域アートのブームによって食傷気味の観客に対し、アピールする新機軸になるのではないかな(他がやらないテーマに意欲的に取り組み、なおかつ、そこでしかできないことをやっているものは、わざわざ観に行く価値があるものと観客は感じるはずだ)。

自由意見

「札幌」という枠組みを超えてもいいのではないかな。例えば、新千歳空港ではいろいろな展示ができそうである。初音ミクのシアターなども使える。「自然」をテーマにするのなら、残念ながら札幌の市街地はあまり向いていない。もっとむき出しで雄大な自然が、例えば「青の洞窟」などで見れる。北海道に来る観光客が見たいのは、普段見られない「自然」ではないのか。崇高な自然美に触れたいのではないかな。富良野の花畑や、洞爺湖の地形などが見たいのではないかな。そ

れを支援するような芸術のあり方—人工と自然を対立させるのではない、芸術のあり方—も可能ではないのだろうか。国東半島芸術祭は、そのようにむしろ自然を推していた。

初音ミクなどや、コンピューター産業のような民間企業がもっと積極的に参加しても良いのではないか。特に、メディアアートを推すのなら、民間の企業の力が必要である。例えば、ハドソンやデービーソフトなど、歴史的なファミコンの会社も存在していたわけであるから、その辺りを再評価したり、むしろ積極的に提示することで、全国各地のゲームファン達にアピールできるのでは(『美術手帖』2017年12月号で、現代の美術のキーワードに「ゲーム」が入っていた)。芸術ファンだけを当て込むのでは、芸術ファンすら見向きもしない。むしろ、芸術の輪郭を改変し、拡張していく創造性こそ、目の肥えた美術ファンを振り向かせるし、芸術に興味のなかった多くの人々を巻き込んでいくことになるはずである。

従来の美術の文脈から離れ、 SIAFの独自性を深化させた画期的芸術祭

細田 成嗣

ライター

評価できる点

何よりもまず、普段あまり大々的に取り上げられることの少ない、先端的な表現活動を行っているアーティストたちに、スポットライトを当てる場が提供されていたことが多いに評価できる(例:堀尾寛太、梅田哲也、また「ノイズ電車」に参加した面々など。一部では評価されているものの、未だ世間的には正当な扱いを受けていないアーティストたち)。同時に、それが「芸術のための芸術」へと自閉することなく、美術の文脈を専門的に学んだわけではない人たち、とりわけ家族連れや子供たちにとっても端的に楽しめるイベントになっていたことも評価できる(例:子供たちも自由に出入りできる《(with)without records》、探検心をくすぐる《点 音》のマップ、スペクタクル的な要素もある《ドッカイドー／海》など)。これらの展示作品を手がけたりパフォーマンスを行ったりしたアーティストたちには、普段美術家ではなく音楽家として活動している者も多く、芸術祭全体が従来の美術の文脈には収まりきることのないものとなっていた。そこに本芸術祭ならではの独自性が打ち出されていたように思う。また、本芸術祭ではインターネット上のSNSなどを情報発信の場に活用していた。ほとんどの展示作品は写真撮影可能であり、そしてその展示作品もいわゆる「インスタ映え」する要素があったことなどから、来場者同士によるSNS上での口コミ的な情報の広がりが見られた。こうした側面も時代の情報環境に即した広報戦略として評価できる。

改善すべき点

複数の展示会場が広範囲に点在しているため、短期間しか滞在しない観光客は全てを見ることができず、そのうちのいくつかを選ばなければならなかった。この「捉えきれなさ」自体は良い(「SIAF2017バンドメンバー」の一人である藪前知子が『web ちくま』での連載記事「ひとつの芸術祭の終わりに」の中で述べていたように、公的助成金を使用する「まちおこし」の一環として行われる国際芸術祭において、リスク回避と綿密な計画性ばかりが重視されることによって、アーティスト自身が初めに抱いていたはずの動機が薄れゆく傾向が強い他の芸術祭に比して、むしろこの「動機」を前面に出した本芸術祭の功績は非常に大きいと言える)ものの、それによって、こうした観光客にとっては、それぞれまったく異なる会場巡りを行うというよりも、むしろ主要スポット(モエレ沼公園、札幌芸術の森など)にばかり行き先が集中してしまい、体験のバリエーションが狭まってしまっていたように見受けられた。また、本芸術祭の基本構想には「札幌らしいアート・シーンの活性化を図る」という目的があるものの、今回の芸術祭に限って言えば、ゲストディレクターである大友良英の周辺のアーティストの作品の印象が強く、少なくとも筆者は札幌市から独自のアート・シーンを感じ取ることができなかった。確かに札幌という地政学的条件や都市の景観を活かした作品、札幌の歴史を掘り起こした展示物、その場所でしかし得ない展示作品やライブ・パフォーマンスなどはあった。すなわち都市全体としての札幌の魅力を感じることはできたものの、そこに息づくアーティストの魅力があまり前面に出てくることがないように思えたのである。これはおそらく、先に述べた「体験の逆説的な画一化」によって見えなくなってしまうところもあるように思われる。

次回開催に向けての アドバイス

音楽家が芸術祭のゲストディレクターを務めるということ、「サウンド・アート」という美術の文脈とも異なる「音楽と美術のあいだ」ともいうべきユニークな芸術祭であることが、SIAF2017の特徴的な側面だと言える。そのためこうした特徴が継続していくことが望まれる。また、それによってどのような「新しさ」を獲得しているのかということも、より多角的な視点から検討されるべきである。例えば今回であれば、アート系の雑誌だけでなく、より多くの音楽雑誌に「音楽フェスティバル」として取り上げられても良かったように思う。次回ではこうしたさまざまなメディアとの連携が望まれる。また、今回は東京オリンピックと同時期に開催される予定のため、「創造都市さっぽろ」の魅力

を今回以上に打ち出していくが必要になると思われる。例えば、今回の芸術祭では展示やパフォーマンスだけでなく、長い時間をかけなければその成果が出てこないようなワークショップ・イベントも複数開催されていた。そうしたイベント参加者たちが3年後にどのような成果を見せるのか、こうした側面を次回の芸術祭と関連させていくことが期待される。それにより、札幌に息づく現在のアート・シーンの独自性が、よりクリアな形で来場者に伝わるような芸術祭となることだろう。

自由意見

筆者はあくまでも芸術祭を目的に、さらに人生で初めて訪れた観光客でもあったため、展示作品やライブ・パフォーマンスを堪能するとともに、札幌という都市の魅力も知ることができた。しかしながらSIAF2017では、その「捉えきれなさ」も手伝って、札幌市民と短期間しか滞在しない観光客との間で、その体験が大きく異なるものになっていたように思う。より具体的に腑分けすると、気軽に足を運べる札幌市在住者、少し時間をかければ訪れられる札幌市近郊の住民、会期中ほぼ一度しか訪れることのない観光客という区分けができる。加えてここには、芸術祭を目的に訪れる人たちと、別の目的で訪れたところ偶然にも芸術祭に出会うことになった人たちがいる(下図参照)。

これらそれぞれのブロックで芸術祭の体験の異なりが見られるように思われる。今回の芸術祭では、「捉えきれなさ」によってそれぞれの異なる体験が、必ずしも序列化されることのない等価なものとしてもたらされていた。ただしSNS上での情報戦略は、芸術祭を鑑賞することを目的に訪問した来場者には有用だが、たまたま訪れた近郊住民および観光客や、イベントをフォローしているわけではない札幌市民に対しては、やや効果に疑問が残るところがある。おそらく来場者の大半を占めるのは札幌市民および都市近郊の住民であるため、ここに向けた情報戦略により注力することが必要になるだろう。こうしたブロックそれぞれに適した情報戦略が望まれるとともに、同ブロック内部での体験の多様性を確保していくことによって、「体験の逆説的な画一化」を回避していくことも必要になるように思われる。

	札幌市民	札幌市近郊住民	観光客
芸術祭が目的	日常生活と密接に関わる中で芸術祭と接する。毎日接する機会がある。	日常生活の範囲内で芸術祭を鑑賞しに出かける。複数回接する機会がある。	芸術祭を鑑賞するために非日常的な時間を費やす。接する機会はほぼ一度きりしかない。
別の目的	芸術祭を知らない／興味がない札幌市民。時間をかけることで認知させる／興味を抱かせることが可能。	何らかの目的で札幌市を訪れた近郊住民。初めの印象によっては、複数回足を運んでもらえる可能性もある。	何らかの目的で札幌市を訪れた観光客。印象が良からうが悪からうが、繰り返し足を運ぶ可能性は非常に少ない。

他の機会では得難い思い切った方針と、 作品を楽しむことを助ける工夫の必要性

吉崎 元章

札幌市芸術文化財団総務課課長職／一般財団法人地域創造派遣／札幌国際芸術祭コミッティー

評価できる点

音楽家であるゲストディレクターの個性が色濃く表れ、テーマへの一貫性が全体を通してみられたことが、他の芸術祭とは異なる特徴を生んでいた。札幌市民にとっても、これまで紹介されることが少なかった表現や、北海道にありながらもほとんど顧みられなかった事物に芸術的視点からスポットが当てられたことで、新たな刺激を得る機会になったと思われる。また、企画チームに地元からも多く加えたことや、広くプロジェクトを募り正式プログラムにしたこと、コンサートや演劇などへの市民参加の機会や大風呂敷プロジェクトでボランティアの活動の場をつくったことなど、前回とは異なり、強く地元を意識し、市民を巻き込もうとする意図が感じられた。この地で長く活動してきた中から発案された企画の数々には、ローカルな話題にとどまらない確かな強度があった。さらに、ゲストディレクターが会期中のほとんどを札幌に滞在し、さまざまなイベントに登場したことが芸術祭全体のまとまり感と市民への親近感を生み、突発的なものを含め、各所でイベントを多発させることで祝祭的な盛り上がりがある程度演出できていたと思う。

改善すべき点

多くの人にとって美しさや心地よさに直結しづらいノイズや「ガラクタ」をもとにした作品群は、視覚体験を重視しがちな美術愛好家や実験的な表現に馴染みの薄い人には戸惑いもみられたようだ。挑戦的な試みは評価するが、作品を楽しむことを助ける何らかの工夫がもう少しあっても良かったのではないかな。札幌において最も入場者が見込める時期でありながら、各有料会場の入場者数があまり伸びなかったことは残念である。入場者の広がりを感じられなかったことは、各イベントでも同様である。オーケストラや演劇、大風呂敷プロジェクトなどに積極的に参加した人達は充実した時間を過ごしたようだが、その気持ちが熱いほど、それ以外のひととの乖離が生まれているように感じた。コンサートや各種イベントに出向いても、そうしたコアな参加者や関係者が大半を占め、互いに親しげに挨拶し合う光景などは、興味を抱いて訪れた他の人に疎外感を味わわせる排他的な雰囲気も少なからず醸していた。それが、ネット上で散見された「内輪だけでの盛り上がり」という印象につながり、一要因にもなっていたのだろう。

次回開催に向けての アドバイス

SIAF単独の成果だけでなく、芸術関係の各種事業や既存の組織、機関が他にも多くある札幌においての芸術祭の役割をしっかりと見据えるべきだろう。3年に一度、大きな予算と規模で行うことができる芸術祭が、札幌の文化に何をプラスしていけるかを考えると、他の機会では得難い先進的で刺激的な思い切った方針で行う重要性を感じる。独自性による北海道外からの注目度も然ることながら、札幌にいかに根付かせていけるかも大切にしてほしい。一度に多くの市民を引き込むことは困難であり、少しずつ広げていくしかないが、少しでも多くの人に興味や関心をもってもらう工夫とともに、それらの人が来やすい、入りやすい環境や雰囲気づくりを心掛ける必要があろう。一方、他の芸術祭に行った時に重宝するのは、作品ガイド付きで各会場を巡るバスツアーである。札幌の場合も会場が分散しているため、有料でも構わないので効率的に巡るための数コースを用意してはどうだろうか。また、子どもだけではなく、高齢者や障がい者が積極的に参加できるプログラムも今後検討してほしい。さらに、札幌ならではの独自性を出すためには、雪が積もった冬期間の開催が、冬季オリンピック・パラリンピック招致を見据える上からも含めて効果的だと思う。

全国各地で行われている芸術祭の魅力のひとつは、普通に観光として訪れただけではなかなか接することができない、その地固有の記憶や文化、庶民の日常に深く触れられることだろう。それは、美術館やギャラリー、整備された観光名所だけではなく、歴史が刻まれた民家や廃校、空き店舗なども会場となっていることにも関係していよう。札幌の芸術祭でも同様の効果が期待できるが、それは観光客に限ったことではなく、住民にとっても自らが住む場所の価値や魅力を改めて見いだすことにつながるものである。また、芸術祭が長く継続されていくことで少しずつ札幌の文化や社会に影響を与えていくはずである。芸術祭ごとに目に見えて残っていくものがあると、徐々に浸透してきていることが実感しやすいのではないだろうか。初回の島袋道浩の作品のように展示作品を残すことは今回難しいだろうが、SIAFで行ったイベントのうちのいくつかを今後も継続的に行っていくなど、モノではなくコトを残していくことも考えられよう。SIAF2017で行ったさまざまな事項のアーカイブ化をさらに深めていくこともその一つである。

「芸術祭ってなんだ？」を問い続けること

－札幌国際芸術祭2017を巡って

吉本 光宏

ニッセイ基礎研究所 研究理事

明確なディレクターシップ

ディレクターシップが遺憾なく発揮された芸術祭。それがSIAF2017の全体的な印象である。ディレクター自身の作品やライブはもちろんのこと、コンセプトや作家・作品のラインナップ、市電プロジェクトなどのイベント等々、街全体がノイズミュージックを奏でるような芸術祭だった。前回のSIAF2014は見そびれたため、資料で把握できる範囲内でのことだが、ディレクター色は今回の方が明確に現れていたのではないかと。国内の他の芸術祭と比較しても、その点はSIAF2017が際立っていたように思う。キュレーターや美術家ではなく、音楽家をゲストディレクターに迎えたこともその一因だろう。ディレクターの選定は、芸術祭の成否を左右する最も大きな要因のひとつである。裏を返せば、大きなリスクを孕んでいるが、SIAF2017はその点で評価できる成果を残したと言える。しかも2回連続で音楽家を起用したことで、SIAFの特徴としてひとつのベクトルを示すこととなった。ゲストディレクター制度は、開催回ごとに独自のコンセプトやメッセージを発することが可能だが、芸術祭として統一したイメージを形成しにくい側面も併せ持っている。SIAFが芸術祭として何を社会に訴えていくのか、市民や地域にとってどんな価値をもたらすのか。3回目には、そうした点について中長期的な視点からの検討が欠かせないだろう。それだけに次のディレクターの選定に注目したい。

都市空間と芸術祭

市街地を使った作品設置は前回よりさらに強化された。全ての会場を回ったわけではないが、個人的には北専プラザ佐野ビル、金市館ビル、りんご、札幌市資料館裏庭などが印象に残った。ロケーションと設置空間、作品内容にある種のゲリラ性が感じ取られ、「ガラタの星座たち」というサブテーマとも合致していた。ガイドブックを頼りに、街中に展開される作品を探索するのは、芸術祭の楽しみの一つである。しかし、一カ所で集中的に開催される場合と比べて、賑わいや祝祭性という点では、不利な点も否めない。モエレ沼公園、札幌芸術の森、札幌市資料館の3会場を回れば主要な作品を鑑賞できるようになっていたが、短期間で市街地の会場も含めて回るのは楽ではない。それを不利な条件とするのではなく、プラスのものとするためには、作品の魅力だけではなく、芸術祭としての仕掛けや舞台づくりも重要な要素である。その点に関して、市電プロジェクトや狸小路TV、テニスコートライブ、札幌駅や地下街に設置された大風呂敷プロジェクトなどは一定の役割を果たしていた。ただし、街中のサインやマップには改善の余地があるように思う。確かに目的の建物にたどり着いているのだが、入口や作品までのルートが分かりにくかった。特にりんごは閉館ギリギリで辿りがすっかり暗かったせいもあるが、最後の曲がり角が分からず数メートルのところで危うくたどり着けなかったところだった。マップには入口を矢印で示すとか、街中でのサインをより工夫するとか、ナビゲーション用のアプリを用意するとか、次回に向けて改善の余地があると思われる。さらに、街中全体を使って芸術祭を展開しようという主催者の意図に対して、観客は実際に芸術祭のどこをどのようなルートで訪れ、何を鑑賞したのか。会場ごとの入場者数の集計結果だけでは限界があるだろうが、その点も次回に向けて検証が必要なポイントの一つだろう。

芸術祭ってなんだ？

日本は国際芸術祭のブームである。昨年(2016年)はさいたま、KENPOKU(茨城県)、今年(2017年)は、岐阜、北アルプス、Reborn-Art(石巻)、種子島、奥能登といった具合に、毎年各地で新たな芸術祭が創設されている。芸術祭のディレクターでなくとも「芸術祭ってなんだ？」と問いかけたい状況だ。しかも現在継続中の芸術祭のほとんどは2000年以降に始まったもので、これほど短期間にこれだけ数多くのトリエンナーレ、ビエンナーレが始まった国は日本において他にはないだろう。乱立に対する批判、あるいはどこも似たり寄ったりの内容になりがちなことへの懸念はもっともなことである。しかしそれは俯瞰的な見方であって、どの芸術祭もその地域に

とっては唯一無二のものであるという点を忘れてはならない。つまり、芸術祭ってなんだ?という問いかけは、普遍的なものであると同時に、開催地域ごとに個別の問いとして考える必要がある。仮に芸術祭を自然環境豊かな町村で開催される「里山型」と、札幌のような都市部で開催される「都市型」に分けた場合、この問いに答えを見いだすのは後者の方がハードルが高いはずだ。里山型の場合、作品を求めてその場所を訪問すること自体に意味を見いだすことができるからである。都会から訪れる人々は、経済性や効率性を優先する中で見失ってしまった地域の歴史や文化の価値を再発見するばかりか、深刻な人口減少と高齢化に直面する日本の現実が突きつけられる。地元の人々は、長い歴史の中で培われてきた文化的な営みや地域資源の価値を見直すきっかけになる。経済的な恵みや地域の活性化に対して芸術祭が果たす役割も小さくない。それ自体が芸術祭本来の目的でなかったとしても、あるいはたとえ一時的なものだったとしても、である。しかし都市型の場合、さまざまな文化施設が整備され、日常的に数多くの文化事業が行われている中で、芸術祭は市民に何を提供し、地域にとってどのような役割を担うのか。そのことを里山型以上に明確にする必要があるだろう。市が主導する文化イベントが他都市と比較しても充実している札幌の場合はなおさらだ。

札幌市の文化事業と 芸術祭

例えば、1990年に故レナード・バーンスタインの提唱で始まった「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」、2007年スタートの「サッポロ・シティ・ジャズ」、26回を数える「YOSAKOIソーラン祭り」、2000本のショートフィルムが集まる「札幌国際短編映画祭」、劇場文化を札幌に根付かせようという「札幌演劇シーズン」等々である。これらの文化事業と比較した場合、芸術祭にはより強い社会的なメッセージや問題提起を期待したい、と思う。ジャズやYOSAKOIのように誰にでも分かりやすい、参加して楽しいというものではない。もちろんそれが悪いというわけではないが、見る人に新たな気づきや思索を促し、現代社会に対する新たな見方、時には批評的な思考を提供することに、芸術祭の少なからぬ意義がある、と思うからである。SIAF2017でもテーマやサブテーマから、ディレクターのそうした狙いを読み取ることができる。テーマには「参加する前と後で世界の見え方が一変するくらいの、そんな強烈な場を自分たちの手で作り出すことが、わたしの考える『祭り』です」とあり、サブテーマとして「ガラクタの星座たち」が掲げられ、「自分たちが捨ててきたものに向き合いつつ未来を発見する」とある。つまり「世界の見え方が一変するようなガラクタ」から芸術祭を組み立てることによって、私たちにメッセージを感じ取ってほしいというのが、今回の芸術祭の意図だったとすると、芸術祭全体からそれを感じ取ることができたのではないか。そういう意味でも、冒頭に述べたとおり、SIAF2017はディレクターシップが十二分に発揮された芸術祭だったと言える。

創造都市における 芸術祭

とは言え、芸術祭ってなんだ?という問いには永遠に答えがないだろう。ある種の解が示されたとすると、それを乗り越えるための問いかけを発することでは、芸術祭としての存在意義が見いだせなくなってしまうと思うからだ。万人に受け入れられるような芸術祭になった途端に、芸術祭ではなくなってしまう。つまり芸術祭には、ある種のわかりにくさ、難解さがつきまとう。そうでなければ芸術祭の意味がない、とまでは言わないが、現代の芸術を扱う以上、そこから逃れることはできないだろう。創造都市にも同様の側面を指摘できる。創造とは今までに見たこともないようなものを生み出すことである。だとすると、市民に分かりやすいものだけを行っていたのでは、創造とは无缘になってしまう。たとえ、一般の市民には受け入れられそうにないものであったとしても、芸術ならではのアプローチで都市に未知の価値を与え、社会的な課題に新鮮な切り口を突きつけるような芸術祭こそ、創造都市には求められている。創造都市には寛容性が必要だ、とも言われる。言い換えれば、未知のものに対する好奇心が創造都市としての懐の深さや力量につながる。創造都市における芸術祭はその中心的な存在であってほしい。そうしたアプローチは、行政組織には決して容易なことではないはずだ。しかし、それが創造都市の宿命であり、芸術祭に期待されることではないか。「芸術祭ってなんだ?」。札幌市にはそれを問い続ける芸術祭を次回以降も期待したい。

インクルーシブでコミュニティ中心の芸術祭

Agnieszka Gratzka アグネシュカ・グラツァ

アートライター

評価できる点

これまで2回の開催でSIAFは知名度の高い音楽家をディレクターに迎え、彼らの作品は本芸術祭のメイン展示になっていた。そのため、サウンドアートやライブコンサートの他、幅広い音楽関連イベントに重点を置き、広く多くの観衆を引き付けるようデザインされていた。これがSIAFの強みの一つであるとともに、この地域密着の芸術祭に強い個性を与えている。SIAF2017は、テーマに対して最新の芸術論や注目を集める芸術家によって主導されるキュレーションによるアプローチを目指しているのではなく、大友良英の大風呂敷プロジェクトに見られるような、あらゆる人を巻き込むインクルーシブでコミュニティ中心の芸術祭になることを目指しているように思われる。多数の面白みがあり、アイコニックな会場で作品を展示することにより、札幌の都市としての魅力を紹介している。

改善すべき点

- ・実務的問題点として、SIAFパスポートの入手が簡単ではなかった。パスポートを購入できる場所は少なかったため、パスポート販売のない会場に来場者が来た場合、遠くからはるばるイベントを見に来たにもかかわらず門前払いされてしまうことになる。
- ・JR札幌駅のSIAFインフォメーションセンターは役立ち、スタッフはフレンドリーで英語が話せたが、案内表示を使うことにより、駅建物中でのインフォメーションデスクの場所を目立つように改善することが可能であろう。
- ・中心部から離れた会場への連絡バスの本数をもっと多ければよかった。
- ・全体テーマはあまり興味を引き付けるものではなく、サブテーマ「ガラクタの星座たち」も面白みがないと言わないが、一般的な来場者にとってはおそらくぼんやりしすぎていたのではないかとと思われる。

次回開催に向けてのアドバイス

SIAF2017に参加したアーティストの大多数は日本人であった。結果として、「札幌国際芸術祭」はぴったりの名称ではないように思われる。SIAFを名称だけでなく真の国際フェスティバルにするためには、海外からさらに多くのアーティストを迎えるべきである。また、クリスチャン・マークレーなどの著名人だけでなく、新進アーティストも含めることにより、SIAF会期中及び準備段階における彼らの札幌滞在が、日本人アーティストとの芸術交流のさまざまな機会を創出するであろう。SIAFは“アート”フェスティバルとして、さらに洗練されたキュレーションによるアプローチや、今日の意味があり、かつ、タイムリーであるテーマの選択により、メリットが得られるのではないだろうか。

自由意見

数多くのフェスティバルやビエンナーレを観てきた者として、SIAF2017においてゲストディレクターの作品が目立って取り上げられていたことに驚いた。大友氏は、彼が参加したライブイベントに加えて、mima北海道立三好太郎美術館での自身の展示の他に、複数会場で作品を展示していた。これは悪いことではないし、大友氏は人気があり広く愛されている人物であるようだが、私は個人的に、今回の芸術祭がこのカリスマ的ディレクターに少しばかり偏りすぎていたように感じた。今後は芸術監督に加えて、キュレーターを選任してもよいかもしれない。

札幌ポリフォニー

Clélia Zernik クレリア・ゼルニク

パリ国立高等美術学校 芸術哲学教授／美術評論家

総評

SIAF2017の特色は、アーティストと市民だけでなく、アーティスト同士、人間と人間以外のものとの間に架け橋をつくり、つながりを構築することへの強い思いにあるのではないだろうか。ゲストディレクターである大友良英もまた、アートによって独立したものの間に調和関係を生じさせていた。各アーティストによる独立した作品をもう少し注意深く見てみると、作品は相互に呼応しているように見える。インスタレーションの多くは、出発点としてガラクタが使用されているが、それらはいまなお音を出し、動き続けていた。例えば、モエレ沼公園でみられた大友のインスタレーションでは、古い機器を接続しあい、星座が形成されており、それは人間ではないものの存在に語りかけているように思われる。毛利悠子のインスタレーションでは、複数の古いピアノが自ら演奏を始める。毛利は大学の長い廊下を風が吹き抜けるサウンドスケープに変え、過去のエコーを表層に呼び戻す。梅田哲也はデパートの忘れ去られた屋根裏で見つけたものを集め、それらを建物の振動に合わせるように作動させる。堀尾寛太は空きビルを使い、自動的にシャッターが開閉したり、照明がついたりするインスタレーションを展開した。この芸術祭を最後に取り壊される建物が、長い眠りから目覚め、あくびをし、叫び声をあげていたかのようだ。生命、記憶、物体の動きは人間の動きよりもはるかに大きい。私たち全てを一つにつなげる、この共通する生命の原理に注意を向けるべきではないか。端聡による美しいインスタレーション《Intention and substance》もまた、生命の循環に目を向けさせる。端聡は非常に短い循環回路で液体と気体の出会いをつくり出し、私たちの概念的カテゴリーを越え、無数の光が放たれる。これらの作品は全てに共通して、人間を除外した自動的な機能を使っている。本芸術祭は、もののつながりや関係性を称え、人々にこの例に従おうと誘っている。これが私なりのサブテーマ「ガラクタの星座たち」の解釈である。このようにして本芸術祭それ自体がポリフォニーとなり、一つのアート作品となる。大友にはフェスティバルを盛大な祝祭へと変化させる並外れた魅力がある。

評価できる点

ライブやパフォーマンス、DJ盆踊りなど、芸術祭に華を添えたイベントが多数あった。また、本芸術祭は、市民や観光客、子どもや高齢者など、あらゆる人を一つにすることを目指しているように思われる。このインクルーシブなコンセプトは非常に重要なものであり、アート界のみを対象とした欧米のビエンナーレ/トリエンナーレのエリート主義的コンセプトとはまったく異なっているように感じた。アート界の周りの全ての人を取り込むことは、社会的つながりを再構築する。できるだけ多くの人々を取り込むことが本芸術祭の目標であるならば、①開幕時における札幌以外での情報発信（推測するに、例えば東京の美術館やアンスティチュ・フランセのような機関などでの十分なPRができていなかったように思われる）、②会期中の会場のサイン（設置箇所や効果）、③終了時における国内及び海外プレスによる報道、来場者数、という3つのデータを評価、数値化することができると良いのではないだろうか。

改善すべき点

本芸術祭が全ての人を取り込もうとするならば、外国人への対応があまり行われなかったことを指摘する。ガイドブックや資料などで英語に翻訳されているのは一部のみであり、サインは読みにくく分かりづらい。各作品の作品解説はよく作られており、うまく英語翻訳されていたが（例えば、端聡の作品解説は極めて分かりやすかった）、全般的・実用的な情報の英語翻訳が非常に少なかった。夏の北海道には大勢の外国人観光客が来るのに、SIAF2017への外国人来場者は少なく、また、本芸術祭に関する英語情報は十分ではなかった。さらに、非常にローカルな地方イベントに参加しているという気分になるのは、おそらく国際的に知名度のある作品やアーティストが不在だからであろう。また、本芸術祭の独自性のあるビジュアルを効果的かつ明確にすべきであった。

日本の多くの芸術祭に共通していることだが、各展示会場が非常に離れていることも多少は来場者の意欲をそぐ要素になりうる。遠く不便な場所にあるように見えた会場に、足を運ぶことを諦めた友人もあり、結果として、本芸術祭の一部しか見ることができず、明確な理解が得られなかったようだ。

次回開催に向けての アドバイス

大勢の来場者と外国人を引き付けるため、今回は国際的知名度の高いアート作品を1、2点展示することを推奨する。クリスチャン・マークレーや大友良英は非常に有名な国際的アーティストであるが、専門家ではない一般的な来場者にとってはやや特殊に感じたかもしれない。一方で、家族的なあたたかな雰囲気や、この芸術祭にエネルギーを与えている社会的・協働的な側面は残す必要がある。作品の気品、地域の歴史、そして芸術祭そのものが持つコミュニケーションを生み出す力を保ちつつ、さらに目を引くようなメジャーなイメージを加えていくことも必要であろう。例えば、全ての資料に本芸術祭のアイデンティティーとなるような画像を入れると良かっただろう。今回のガイドブックやウェブサイトにあるような抽象的な色使いよりも、簡単に認識できる画像の方がベターであったと考える。その方が独自性をより強くビジュアルで訴えることができ、あまり情報を得ていない来場者や外国人にも本芸術祭の特徴を瞬時に理解させることができたであろう。情報のコミュニケーションに関する取り組みは、どちらかという一般的なガイドラインに即して行われるべきであり、また、北海道に観光で来る人の流れを本芸術祭に引き付けるための取り組みを行うべきである。なお、学術的な解説や内容は極めて正確であり、うまく行われていた。

自由意見

個人的には、いくつかの要素が一つのインスタレーションから次のインスタレーションへと循環し、大友良英の意図する目的が明らかにされていたと感じた。大友のようなミュージシャンを除いて、一般的には、アーティストが協働することはまれである。大友はアーティストにその認識を持たせることなくコラボレーションさせ、芸術祭の参加アーティストからジャズバンドのミュージシャンへと変化させた。これが、SIAF2017のテーマである「芸術祭ってなんだ?」の一つの解釈である。この疑問符は、密かに解釈の創出を待ち望んでいることを意味している。つまり、この芸術祭自体が、全ての作品がつながって生まれたマスターピースであるのだ。大友は芸術祭というコンサートの指揮者のように、異なる芸術表現の間でハーモニーを生み、人々をつないでいる。キュレーション自体が芸術表現の一つであるとも言えるだろう。参加アーティストが一つになり、家族や地域に親しみのあるものがあつたことは高く評価するが、外部には十分に開かれていなかったように思われる。SIAFには、再構築に向けた力や情熱は十分にあるように思われる。私は、英語を話す友人が会場を案内してくれたことから、本芸術祭の高いクオリティと一貫性を大いに評価している。しかし、そのような手助けのなかった人たちは、この芸術祭の唯一性や知性を理解できなかったのではないかという懸念が残る。

市民と直接つながり、コミュニケーションする芸術祭

David Novak デヴィッド・ノヴァク

カリフォルニア大学サンタバーバラ校音楽科准教授

総評

2017年9月20日から25日までSIAF2017に参加した。この期間中、ほぼ全ての展示を見て回り、パフォーマンスやイベントにも参加することができた。私は総合的に、SIAF2017に対して極めて好ましい印象を持った。展示の質は非常に高く、会場自体にとっても独自性があり、また芸術祭の一部として多くのワークショップやパフォーマンスイベントが企画されており、活気に満ち充実したスケジュールを構成していた。一連の展示物は先進的であり、既存の組織や施設、コミュニティスペースの活用や市民参加の促進という観点の両方において、札幌の資源を存分に活用していると感じた。大友氏は素晴らしいキュレーターであり、本芸術祭開催における大友氏の役割は、コンセプト的にもイベントの段取りに関しても顕著であり、芸術祭全体に同氏の影響が深く表れていた。

評価できる点

大友氏は地域社会を巻き込み、展示とイベント/パフォーマンス/ワークショップを織り交ぜてSIAF2017を企画した。このアプローチは、社会プロジェクトに携わったキュレーターであり、ミュージシャンでもある同氏個人の経歴を反映しており、今世紀に入って以降の社会志向アートへの大きな「社会の転換」ともぴたりと合致している。ノイズ電車や市電放送局 JOSIAF、DOMMUNE SAPPORO!、OYOYO まち×アートセンターさっぽろなどのプロジェクトが一般参加型であったことで、札幌市民と直接つながり、コミュニケーションする芸術祭が実現された。札幌は、国際フェスティバルの会場として、モエレ沼公園や札幌芸術の森、札幌市立大学、mima 北海道立三好太郎美術館やさまざまな商業施設に恵まれており、芸術祭を巡ることが札幌の建築様式やライフスタイルを楽しむスペシャルツアーになっていた。さらに、おそらく札幌ならではのことは、ゲストハウス、駅の通路、商店街、ビルなどのローカルな場所が展示会場として使用され、街全体が芸術祭に織り込まれていた手法も面白く味わった。これにより札幌の街を探索し、日常生活に溶け込む感覚がもたらされていた。「大漁居酒屋てっちゃん」が特に記憶に残った。

また、札幌のアートと音楽の長い歴史を垣間見ることもできた。NMA ライブ・ビデオアーカイブ、mima 北海道立三好太郎美術館、そして札幌市資料館での展示は、市内の美術組織やアーティストに新しい作品をもたらした。私の限られた視点からではあるが、大友氏が地元のアートコミュニティを本芸術祭に巻き込み、札幌市民が最新のサウンドアートやパフォーマンスに触れ、クリエイティブな生活へのインスピレーションを得たことは素晴らしい。SIAF2017は、地元から国際的なコネクションに至るまで、利用できる資源の全てをうまく活用していた。「アジア・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル」は新進即興演奏者の国境を越えたネットワークとながら絶好の機会であったし、札幌芸術の森会場のクリスチャン・マークレーの作品は重要な新しい取り組みであった。

改善すべき点

SIAF2017の最大の難点は、会場が市内全域に遠距離で散らばっているという根本的な問題であった。この問題は札幌の都市構造に伴うものであろうし、簡単に解決されるものではない。特色ある場所を利用しながらも、この問題をいかにスムーズに変えていくことができるか、私には分からない。私が経験したところでは、会場連絡バスはモエレ沼公園や札幌芸術の森へ行く際には便利であったが、バスをつかまえるのは不便な場合もあり、また満員だったこともあった。地下鉄やバスを使ってモエレ沼公園に自力で行くこともできたが、日本語を話せない人にとっては難しいのではないと思う。札幌駅は、混雑しすぎていて作品を簡単に設置できる場所ではない。通りすがりの人が思いがけずアート作品に目を留めるには良い場所であるが、プログラムからその場所を見つけ出すのが難しいことから、私なら札幌駅に重要な意義を持つ作品を設置することはしない。また、この点に関連して、英語版の作品解説が主な印刷物に掲載されていれば、日本語を

話せない来場者に役立つのではないだろうか。展示会場を訪れることは時間を大いに費やすため、何が見られるのかという意義がさらに分かるものや、本芸術祭のコンセプトや目的に関するPR資料という観点から、もう少し内容のあるものが求められるのではないと思う。

最後の指摘としては、本芸術祭のキュレーションへの大友氏の有益かつ影響力の大きな関与が、別の観点からはセルフプロモーションであるとの間違っ了解をされてしまう可能性がわずかにあるということである。大友氏は、キュレーターとして独自性のある素晴らしい人物であり、SIAFの選考は称賛に値する。総合的に、これは大成功であった。しかし、このキュレーターの影響力が独自のネットワークや人脈に強く反映するのは避けがたく、また同氏の経歴が押し出されすぎていると見られる可能性はあった。例えば、キュレーターが自分自身の芸術活動に焦点を当てた展覧会(例:大友良英アーカイブ)を開催することは、あまり一般的ではないだろう。私の個人的見解としては非常に興味深かったが、この展示は参加アーティストの中でも作品紹介を行う最も大きな展示であっただろうし、本芸術祭で注目を浴びた大友氏の他のインスタレーションやパフォーマンスと相まって、参加アーティストの中でアンバランスな展示ではないか、という懸念を引き起こしたかもしれない。一方で、キュレーターが開催地に6カ月間移り住んで地域社会に溶け込むというのも一般的ではない。よって、彼の大きな関与によるメリットは数々あった。大友氏の類まれな人物像や献身によって、たくさんのエネルギーや参加者を生み出し、また、本芸術祭を唯一無二のものにしたのは明らかであることを改めて述べておきたい。

次回開催に向けての アドバイス

SIAFの現行モデルには多くの長所がある。札幌はアートフェスティバルにはぴったりの美しい場所である。今回のパフォーマンスイベントやワークショップは社会的資源を耕し、札幌におけるクリエイティビティーを培うための素晴らしいモデルであったと感じた。市民がSIAFに寄与するプロジェクトに参加できることを知っていれば、芸術祭や地元アート界にさらに積極的に関与ようになる。大友氏のモデルはこの点において成功を収めた。結局のところ、芸術祭が長続きする長期的価値を生み出すのは、このような市民による継続したクリエイティブ活動のネットワークであり、それによって市民と外からの来場者の両方が、札幌は開かれたアートと文化の街であるとの認識を持つのである。従って、札幌市は力強いアートコミュニティの育成のため、SIAF開催年以外においてもアートプロジェクトを継続支援していくべきである。これは、一人一人のアーティストやアートグループの活動や、アートグループとコミュニティとの間で行うプロジェクトを促進する観点から、日常生活にアートを持ち込むべく、学校やアウトリーチの場などで実施していくべきである。創造的な機会が生み出される都市を札幌市民が志向しているとなれば、札幌市は芸術文化にすでに深い関わりのある都市であり、それを背景にSIAFは自然と生じてくるといえる。さらに地域に根ざした社会的創造性の価値が生まれれば、SIAFはより一層独自性の高いイベントになるだろう。あらためて、素晴らしいイベントを開催した主催者とキュレーターに拍手を送りたい。SIAF2017は将来に向けた大きな一歩であった。

魅力的で時に札幌の景観の探求をすることになった芸術祭

Reuben Keehan ルーベン・キーハン

クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館 (QAGOMA) アジア現代美術キュレーター

総評

1980年代から90年代にかけて地方美術館ブームの再来のごとく、日本は今、新たなビエンナーレや芸術祭の乱立を経験している。これは、資金や動員の取り合いという大きな課題を各事業にもたらす一方で、重要な問いも提起している。それは、大規模芸術祭に特徴を与えるものは何か、またそれは現状の文脈にどのように作用するのか、という問いである。

SIAFは、この土地の持つ地理的独自性や、初回から2回続けて、アーティストをディレクターに起用した点が特色となっている。興味深いことに、坂本龍一と大友良英はビジュアルアートではなく、ミュージシャンとして前衛音楽とポピュラー音楽にまたがる活動をしている。実際にSIAF2017開幕のプレスイベントにおいて、大友は「現代美術」という制度に対する反感を率直に公言し、多様なインスタレーションやパフォーマンスを通して主として音(=sound)に焦点を置いた展示をつくり上げていた。会場は、市内中心部から郊外にある主要会場まで40カ所以上にわたって広がり、札幌の景観を巡るという点においても本芸術祭は魅力的かつチャレンジングなものであった。

最も心ひかれた2つの会場は、市内中心部から離れた場所にあった。イサム・ノグチによる明確なビジョンが貫かれたデザインによるモエレ沼公園と南部に位置する札幌芸術の森である。両施設ともに、広大な野外環境と、アートに適した既存スペースであるという特徴を有している。芸術の森に隣接する札幌市立大学では、本芸術祭の見所の一つである毛利悠子の素晴らしいサウンドインスタレーション《そよぎ またはエコー》が展示され、札幌芸術の森美術館では、クリスチャン・マークレーの作品を概説するような優れた展示が行われていた。その他の見所としては、開幕週に行われたマークレーと大友によるアコースティックな実験的サウンドパフォーマンスと、正規の芸術表現から外れ、まるでそれに対抗するような北海道独自のクリエイティビティーに敬意を表した「札幌と北海道の三至宝 アートはこれを超えられるか!」が挙げられる。

評価できる点

明らかに実験的な要素の強い芸術祭において、大友は「盆踊り」の開催によって非常にアクセスしやすい入口をつくった。また、多数の会場にわたる展開により、来場者は各会場を移動しながら札幌のさまざまな側面を体感することができた。展覧会という観点から見ると、具体的なテーマを持たせるのではなく、はっきりとした手法と、音というメディアに焦点を置くという明確なアプローチがあったと言えるかもしれない。作品は概ねクオリティが高く、札幌の歴史や背景との関連性が感じられるものであり、また、会場の選択もうまく行われていた。

改善すべき点

来場者からは共通して、ガイドブックに掲載されていた地図のクオリティに対しての不満を聞いた。曖昧で不正確な部分が多い傾向にあった。概して、SIAF2017のような複数の会場で構成する大型芸術祭の場合、特に札幌以外からの来場者にとっては、地図は可能な限り明確かつ正確であることが重要である。市内にある各会場間を移動することは思わぬ場所の発見に恵まれる一方で、一般の来場者にとっては厄介なことになることもあり、優れた展示作品との出会いの機会を減らしてしまうことになるだろう。

次回開催に向けてのアドバイス

芸術祭に特徴を与えるものは何か、またそれは現在の芸術祭の文脈にどのように作用するのかという問いに立ち返ると、重要なのは札幌と北海道の背景に焦点を置くことであると言える。この点から、日本の他の芸術祭やビエンナーレにはできない方法で、どのようにしたらこの芸術祭を「国際的」にすることができるだろうか。ボーカルグループ・マレウレウの参加や、毛利悠子の砂澤ビッキ作品への関心は、現代のアイヌの表現と、沖縄や台湾、フィリピン、ポルネオ、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋及び北米を含む各地の先住民アーティストとの対話のプラットフォームをSIAF

が創出し得ることを示唆している。SIAFには、ダイナミックで学際的なイベントであることを越え、北海道におけるアート制作の将来的な発展に直接インパクトを与えられる豊かな可能性がある。

自由意見

私は現代美術を専門とするプロのキュレーターであるが、制度としての「現代美術」に対して大友が示した反感に共感を覚えることがあるのを認めなくてはならない。一方で、現代美術をより広い文化領域に開こうとして、美術館や芸術祭が大手映画会社やファッションレーベル、世界的なブランドなどの商業文化を頻繁に活用し、それによって実験音楽、文学、演劇、ダンス、映画などに見られる真の実験やイノベーションが犠牲となっていることも、私は知っている。SIAF2017は、ストリートフェスティバルや地域の祭りといった異種文化の要素を取り入れることで、大衆を引きつける力を得た。今後の芸術監督の人選については、坂本や大友の後継者にふさわしい人物を見つけることが重要だと私は考えている。後継者は、商業主義を必要とせずに大衆受けするものとアバンギャルドとのバランスを取ることができ、ショッピングモールで見られるようなもののレプリカではなく、現代美術を他の実験的分野（音楽、文学、演劇、映画又はそれ以外のものであるかもしれないが）に広げていくことのできる人物であるべきだ。また、個人的な見解として、SIAFの課題は、本芸術祭の文脈において最も意味のある国際性の担保を模索しながら、刷新と継続のバランスをうまくとっていくことであると考えている。このことは、飽和状態となってきた芸術祭市場において、差別化を図ることにもつながるだろう。

4 来場者アンケート

来場者の属性や満足度、意見などを把握するため、9会場（モエレ沼公園、札幌芸術の森、札幌市立大学、北専プラザ佐野ビル、北海道教育大学 アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG、札幌市資料館、JRタワー プラニスホール、北海道大学総合博物館、札幌宮の森美術館）で来場者アンケート調査を実施した。（回答数3,253件）

※表記の割合（%）は、選択肢ごとに小数点第二位を四捨五入しているため、単一回答の設問であっても合計が100%にならない場合がある。

※各設問で、未回答（未記入）などで回答内容が不明の場合は人数から除いている。

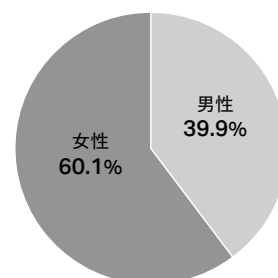
※表では、各年代または居住地ごとに最も高い割合の項目には 、2番目は 、3番目は で表示している。

属性

【性別】

	人数	割合	前回の割合
男性	1,267人	39.9%	38.4%
女性	1,908人	60.1%	61.6%
合計	3,175人	100.0%	100.0%

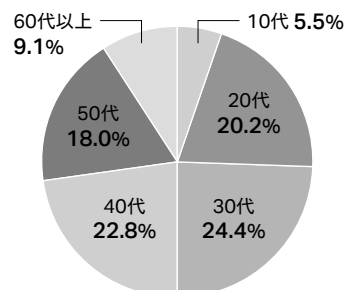
前回（SIAF2014）とほぼ同じ割合



【年代】

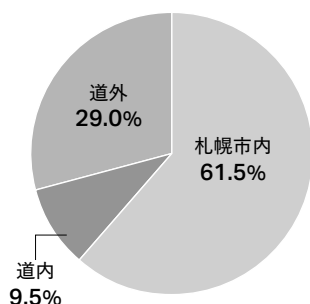
	人数	割合	前回の割合
10代	179人	5.5%	8.2%
20代	652人	20.2%	23.6%
30代	788人	24.4%	21.7%
40代	739人	22.8%	17.5%
50代	583人	18.0%	13.8%
60代以上	293人	9.1%	15.2%
合計	3,234人	100.0%	100.0%

前回（SIAF2014）より
60代以上の割合が減少



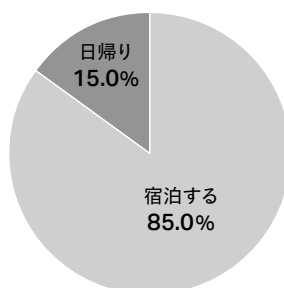
【居住地】

札幌市民が約61.5%



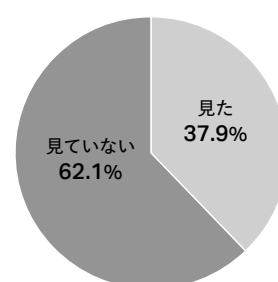
【札幌市外在住者の宿泊の有無】

札幌市外から来た人の85%が宿泊



【前回（SIAF2014）の観覧】

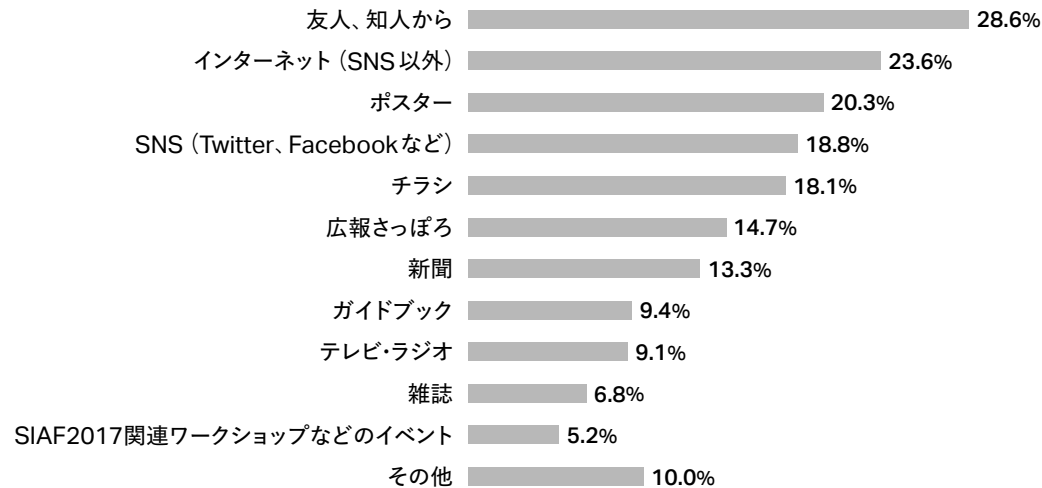
62.1%が今回初めてSIAF観覧



開催を知ったきっかけ、観覧理由

【開催を知ったきっかけ】(複数回答可)

全体では、多い順に「友人、知人から」、「インターネット(SNS以外)」、「ポスター」だったが、年代別では10代～30代が「友人、知人から」、40代では「インターネット(SNS以外)」、50代では「チラシ」、60代以上では「新聞」が最も多かった。

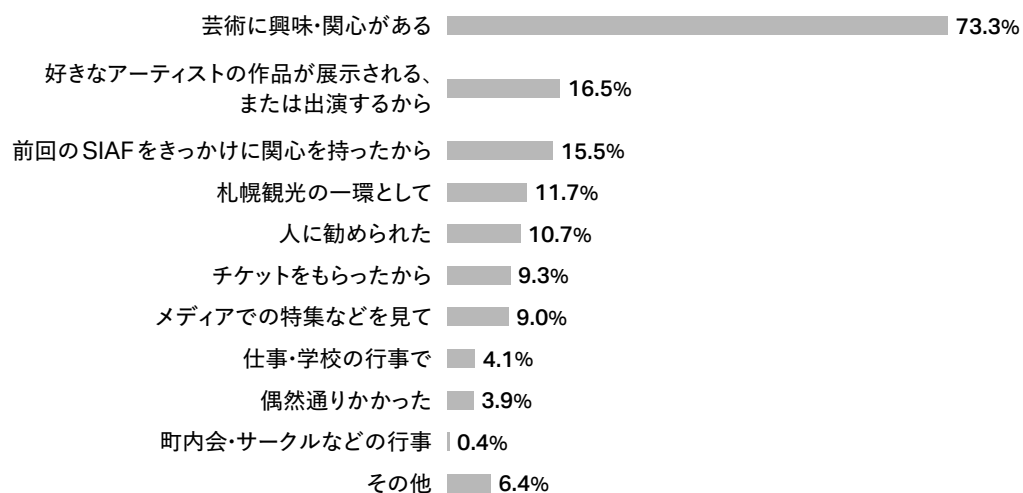


【きっかけ×年代】

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
友人、知人から	28.6%	31.6%	37.6%	33.0%	22.3%	23.7%	19.4%
インターネット(SNS以外)	23.6%	11.9%	22.6%	29.5%	24.6%	23.7%	13.8%
ポスター	20.3%	20.3%	25.0%	15.9%	20.8%	20.1%	20.1%
SNS (Twitter、Facebook など)	18.8%	9.0%	24.3%	22.1%	22.8%	13.3%	4.5%
チラシ	18.1%	15.3%	16.3%	12.8%	20.0%	25.3%	19.7%
広報さっぽろ	14.7%	11.3%	5.7%	9.4%	19.7%	20.8%	26.6%
新聞	13.3%	4.5%	5.2%	4.6%	14.9%	22.7%	37.0%
ガイドブック	9.4%	2.3%	6.6%	6.9%	11.1%	13.6%	13.8%
テレビ・ラジオ	9.1%	6.2%	5.4%	7.0%	10.3%	12.2%	15.6%
雑誌	6.8%	3.4%	7.1%	6.6%	7.9%	7.0%	5.2%
SIAF2017関連ワークショップ等のイベント	5.2%	2.8%	3.4%	3.4%	6.7%	8.6%	5.2%
その他	10.0%	32.2%	8.4%	8.2%	9.6%	7.9%	9.7%

【観覧理由】(複数回答可)

全体では、多い順に「芸術に興味・関心がある」、「好きなアーティストの作品が展示される、または出演するから」、「前回の札幌国際芸術祭をきっかけに関心を持ったから」。また、全ての年代で「芸術に興味・関心がある」が最も多かったが、次に多いのは、10代では「人に勧められたから」、20代では「人に勧められたから」「好きなアーティストの作品」、30～40代は「好きなアーティストの作品」、50代では「前回のSIAFがきっかけ」だった。居住地別でも「芸術に興味・関心がある」が最も多かったが、次に多かった理由は、市内居住者では「前回のSIAFがきっかけ」、道内および道外の居住者では「好きなアーティストの作品」であった。



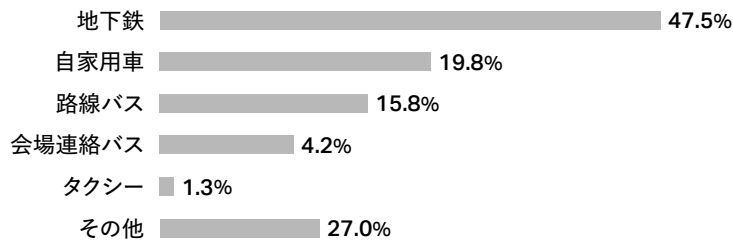
【観覧理由×年代】【観覧理由×居住地】

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	市内	道内	道外
芸術に興味・関心がある	73.3%	55.4%	78.0%	76.9%	73.8%	70.9%	68.9%	70.2%	74.2%	79.8%
好きなアーティストの作品が展示される、または出演する	16.5%	6.8%	16.0%	17.3%	22.3%	14.1%	11.8%	12.0%	15.6%	26.5%
前回のSIAFをきっかけに関心を持った	15.5%	5.6%	10.1%	12.6%	17.3%	23.2%	22.5%	18.5%	14.9%	9.4%
札幌観光の一環として	11.7%	10.7%	15.8%	11.6%	11.1%	9.2%	9.3%	5.8%	8.3%	25.2%
人に勧められた	10.7%	24.9%	16.0%	10.7%	7.1%	7.7%	5.9%	11.2%	11.6%	9.4%
チケットをもらったから	9.3%	11.9%	10.1%	9.2%	8.7%	9.9%	5.9%	12.4%	10.9%	2.1%
メディアでの特集等を見て	9.0%	6.8%	5.7%	5.7%	10.5%	12.9%	15.9%	11.7%	7.0%	4.2%
仕事・学校の行事で	4.1%	15.8%	6.5%	2.7%	3.3%	2.3%	1.4%	3.3%	5.3%	5.5%
偶然通りかかった	3.9%	8.5%	5.2%	3.4%	4.1%	1.6%	3.8%	3.8%	5.6%	3.6%
町内会・サークルなどの行事	0.4%	1.7%	0.6%	0.1%	0.0%	0.2%	1.0%	0.3%	0.3%	0.5%
その他	6.4%	7.3%	4.6%	6.4%	6.1%	7.5%	8.0%	6.8%	4.6%	5.9%

来場方法

【札幌市内移動に伴う交通手段】(複数回答可)

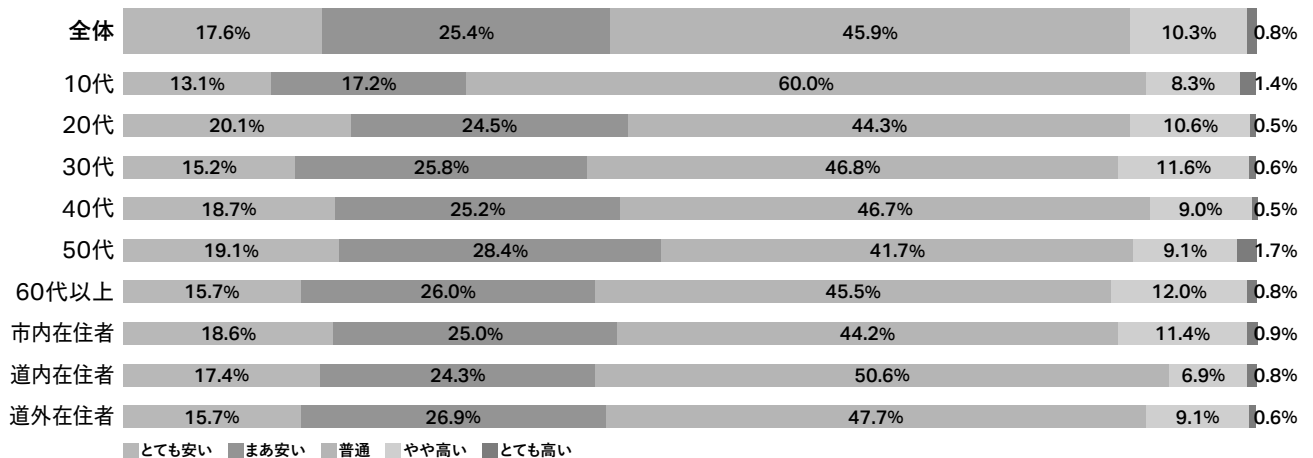
全体では、「地下鉄」が最も多かった。「その他」の回答としては、電車や自転車の利用など。



パスポート

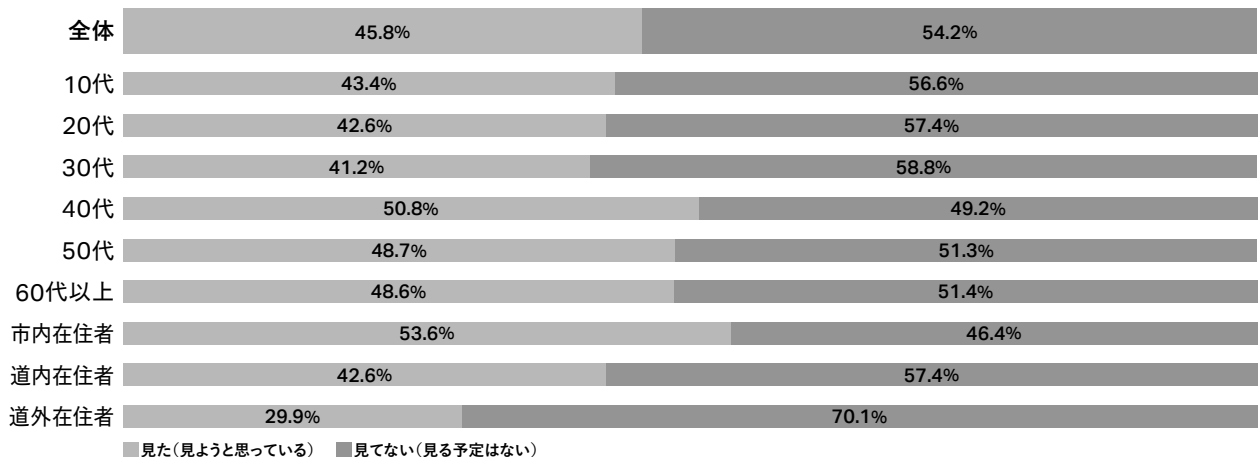
【料金】

「とても安い」、「まあ安い」、「普通」を合わせると88.9%であり、購入しやすい価格設定であったと考えられる。



【同じ会場の複数回来場(予定を含む)】

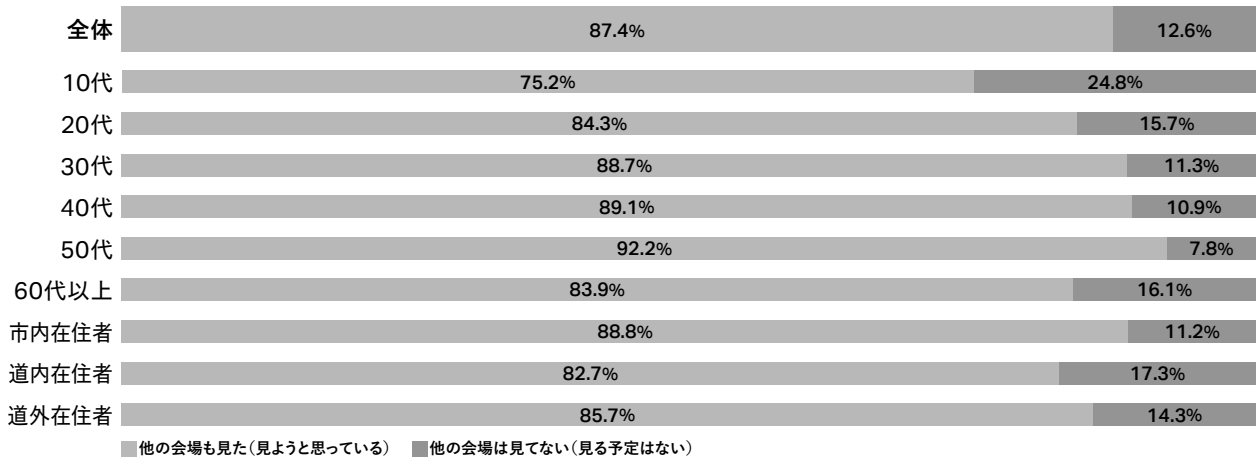
全体では「見た(見ようと思っている)」は半数を下回ったが、市民は半数が複数回見た(見ようと思っていた)。



札幌国際芸術祭全般について

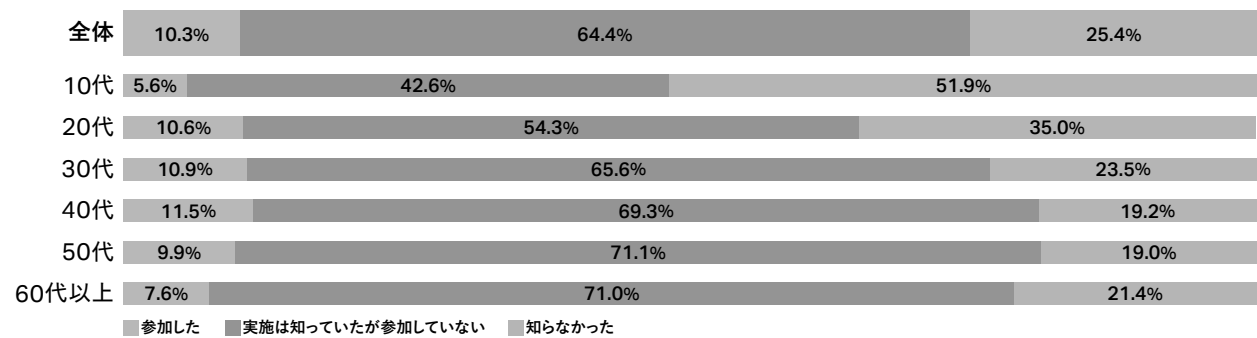
【他会場の観覧(予定を含む)】

「ほかの会場も見た(見ようと思っている)」が87.4%



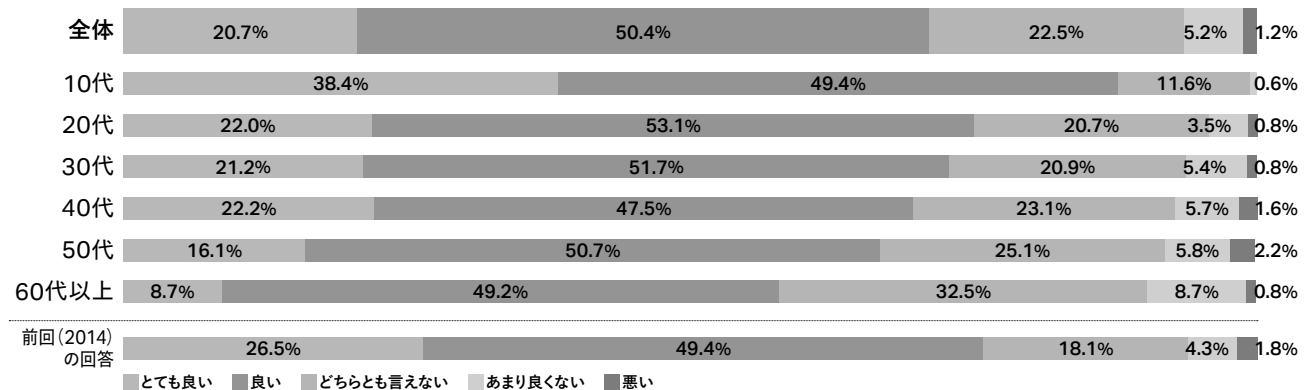
【会期前の催しの認知度】

「参加した」は10.3%、「実施は知っていたが参加していない」は64.4%



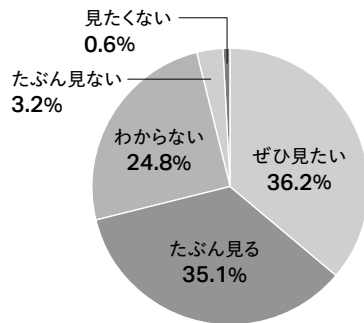
【全体的な感想】

「とても良い」+「良い」が71.1%。年代別では、「とても良い」+「良い」が、10代では87.8%だが、60代以上では57.9%にとどまり、年代が高くなるにつれ減少する傾向が見られた。



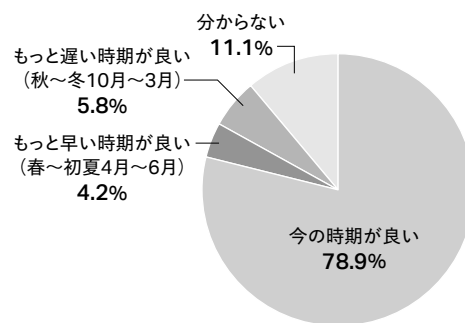
【次回SIAFの観覧希望】

「ぜひ見たい」+「たぶん見る」が71.3%



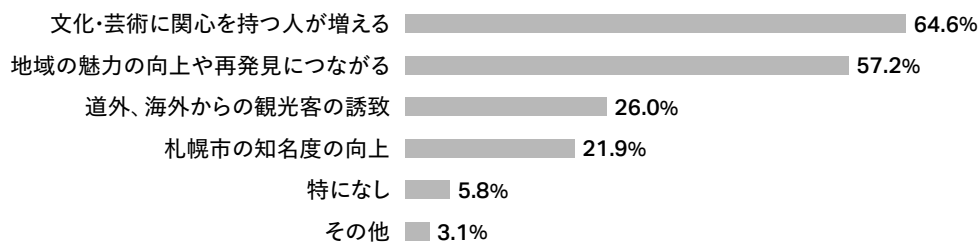
【次回SIAFの開催時期】

「今の時期が良い」が78.9%



【SIAFの開催効果】(複数回答可)

全体で「文化・芸術に関心を持つ人が増える」が64.6%、次に「地域の魅力向上や再発見につながる」が57.2%であった。「観光客の誘致」と考える人は、全体で26%、20代以上では年代が高くなるほど減少した。



【開催効果×年代】

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
文化・芸術に関心を持つ人が増える	64.6%	63.2%	67.4%	62.5%	65.1%	63.5%	66.4%
地域の魅力の向上や再発見につながる	57.2%	46.0%	57.8%	60.3%	57.9%	57.6%	52.3%
道外、海外からの観光客の誘致	26.0%	31.3%	32.1%	29.6%	24.4%	20.5%	14.1%
札幌市の知名度の向上	21.9%	24.5%	23.4%	19.6%	22.2%	21.1%	23.8%
特になし	5.8%	6.1%	4.7%	4.9%	5.8%	7.2%	7.4%
その他	3.1%	1.8%	2.7%	3.6%	3.9%	2.7%	2.3%

自由意見

○展示内容等について

- ・美術館や展覧会にはないような作品ばかりで、とても新鮮だった。
- ・現代アートには興味がなかったが、札幌に眠る宝を発掘するような展示が多くておもしろかった。
- ・北海道の文化や抱えている問題、歴史について考えたり知ったりする機会となり、とてもよかった。
- ・会場に行き、作品を見るまではどのようなものか予想もつかないけれども、見るとその作品の魅力や作者の考えたことに触れることができた。こういうものはやはり、実際に見ないと分からないものだった。
- ・これほどアーティストと接する機会がある芸術祭は今までになく、よかった。
- ・参加してみると楽しめる芸術祭であったが、内容に偏りがあった。
- ・一つ一つはおもしろかったが、何度も似たものに出会うと新鮮さが小さくなっていった。
- ・芸術の裾野を広げるためには、もっと分かりやすい作品がよい。
- ・地域との関わりが分かりづらかった。地域の魅力や芸術への関心が向けられるような仕掛け、仕組みづくりに課題があると感じた。
- ・難しいテーマが多いので、間口を広げるためにも、ていねいな説明やアート以外の楽しみを用意するなど、工夫が必要。
- ・会場間の移動に時間とお金がかかるわりには、1会場の展示が物足りなかった。
- ・メインとなる作品、見どころが分かりにくい。
- ・もっと海外のアーティストを呼んでほしい。
- ・子どもと一緒に楽しめるものを増やしてほしい。

○作品解説について

- ・スタッフの説明で、作品が物だけでなく、空間・光・音の全てだと理解したときに感動した。
- ・作品解説、地域との関わり、鑑賞のポイントなどを分かりやすい言葉で解説してほしい。
- ・アーティストのことをよく知らない人にとっては、作品の意図等を素人にも分かりやすい広報(ガイドブックやホームページ)があると、作品を見てみたい気持ちになる。

○広報・PRについて

- ・どこで何が見られるのかよく分からず、情報も探しにくいので、見に行く気持ちがだんだんと削がれた。
- ・パンフレットもウェブサイトも分かりづらい。デザインの格好良さだけではなく、会場や日時、展示内容などの基本的な情報を分かりやすく伝えてほしい。
- ・会場数、イベント数が多いうえに、開場時間がバラバラだったり、開催日が限定的なものもあったので、そういった情報がひと目で分かるものが必要。
- ・ガイドブック等に参加アーティストの索引を掲載し、アーティストと会場の組み合わせを分かりやすくしてほしい。エリアから会場や作品、アーティストを探すしかなく、とても不便だった。
- ・会場へのアクセス情報や地図が、パンフレット、ガイドブック、ウェブサイト、どの情報を見ても分かりにくい。
- ・市民の認知度がまだまだ足りない。興味・関心がある人だけの内輪受けになってはいけない。
- ・告知や申込方法がウェブサイトのみのものが多く、関心があっても知る機会がなかった。インターネットやSNSを利用していない人のことももっと考えてほしい。

○会場、アクセスについて

- ・観光目的では訪れることのないような場所に行くことができてよかった。
- ・SIAFパスポートの特典の会場連絡バスが便利だった。
- ・会場が分散すぎて、各会場に行きにくかった。
- ・会場へのアクセスが悪い。効率よく回れない。
- ・複数の会場を巡る、無料(格安)のバスがあると回りやすい。
- ・最寄り駅からの道案内(情報)が不親切で、札幌市民でも迷った。
- ・階段だけの会場もあり不便。障がいのある方や高齢の方にも配慮してほしい。

○会場連絡バスについて

- ・会場連絡バスの情報が分かりづらい。ウェブサイトの情報も見づらかった。
- ・SIAFパスポート特典であれば、パスポートの購入時にバスの案内(チラシなど)がないと情報が分からない。
- ・バス受付時の整理券番号と乗車順は連動させた方がよい。不公平感が残った。
- ・平日も会場連絡バスを運行してほしい。

○SIAFパスポート、チケット、スタンプラリーについて

- ・パスポートがきっかけで、札幌市内のさまざまな場所を巡ることができて楽しかった。
- ・スタンプラリーが楽しかった。ノベルティは販売されている公式グッズではなくオリジナルのものが欲しかった。
- ・パスポートやチケットは、どの会場でも購入できるようにしてほしい。
- ・市外からは、各会場が離れているため見る会場を最低限に絞らざるを得ず、パスポートは割高感があった。
- ・パスポートの価格が一番安い早割期間に、どの会場で何が見られ、各会場の入場料がいくらかも分からず、購入に困った。
- ・道外から来た者にとって、JR札幌駅にあるSIAFのインフォメーションで前売引換券の交換ができなかったことは、とても不便だった。

○その他

- ・ほかの芸術祭や市内のイベントなどと連携できるとおもしろいと思う。
- ・もっと学生に参加してもらい、市民参加の流れをつくってほしい。
- ・芸術祭が継続するためには、地元の後押し、地元への還元が必要。
- ・芸術に関心がない人にも入りやすい雰囲気をつくらなければ、集客を見込めないのでは。
- ・アートが好きなのでおもしろかったが、メッセージ性があまり感じられず、札幌で行う意味が分からなかった。もっと解説があったり、議論の場をつくるなどして、意図や意義の発信が必要。
- ・国際芸術祭という名前だが、国際的な感じは伝わらなかった。
- ・道内のアーティストを国際的に紹介できる機会を増やし、育てて、活躍できる環境をつくってほしい。

5 ボランティア(アンケート結果)

概要

(1)体制

前回のSIAF2014では、事務局主体でボランティアの仕組みを作った。会場運営(作品監視、会場案内、入場整理など)、情報発信(かわら版発行)などを行った。

SIAF2017では、ボランティア中心の会場運営を見直し、市民が主体となる活動を模索するため、2016年10月に市民と一緒にボランティア活動の仕組みを考えていく「ボランティアプロジェクト」を立ち上げ検討を重ねた。その結果、展示(札幌大通地下ギャラリー500m美術館、モエレ沼公園など)やプロジェクト(大風呂敷プロジェクト、市電プロジェクトなど)のサポート活動と、ボランティアによる自発的な活動「SIAFたんけん隊(何かやり隊)」の2種類を実施することとなった。

《ボランティアプロジェクト》

名称	日時	内容	参加者数
キックオフミーティング	2016年10月11日(火) 18:30~20:30	大友良英ゲストディレクターがSIAF2017の企画などを語った後、参加者で、芸術祭への関わりについて意見交換を行った。	55人
第2回ボランティアミーティング	2016年12月14日(水) 18:30~20:30	ボランティアの基本的な考え方を確認し、来場者に楽しんでもらうための方法やおもてなしについて意見交換を行った。	26人
第3回ボランティアミーティング	2017年 2月28日(火) 18:30~20:30	来場者の満足度を高めるための活動をテーマに意見交換を行った。	14人

《ボランティア登録・活動の流れ(登録開始2017年5月11日(木))》



- ・登録条件は、原則15歳以上(中学生は除く)で活動マニュアル等を遵守できる方。
- ・事前説明会を2回実施した。(1回目:5月20日(土)10:00~11:30 参加者52人/2回目:5月24日(水)18:30~20:00 参加者60人)
- ・会期中、札幌市資料館会場内にボランティアセンターを設置し、ボランティアの申し込みや、会場とのボランティアの受け入れ調整などを行った。
- ・登録者は356人で、うち、活動参加者は202人。延べ活動人数は852人。
- ・登録者のうち、約4割は活動に参加しなかった。その理由について、「スケジュールが合わなかったから」が最も多く、次に「参加したいと思う活動がなかったから」であった。(ボランティア登録者向けアンケート結果による)

(2) 活動内容

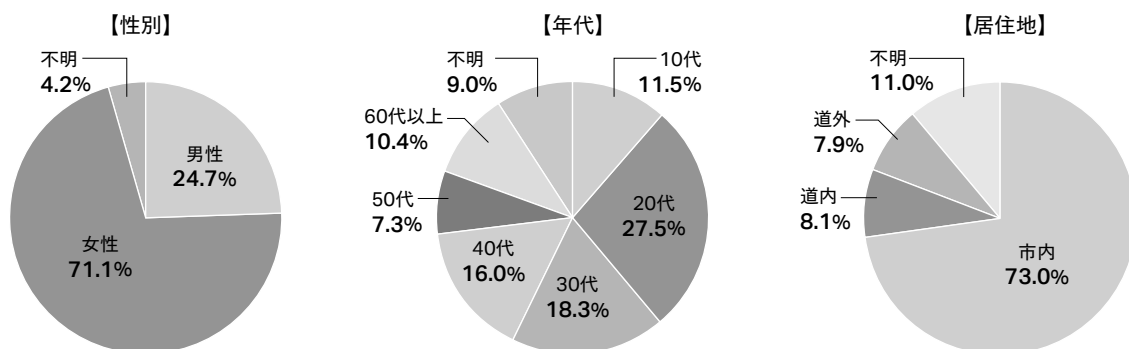
- ・ 作品制作の補助、会場案内などのサポート。
- ・ ボランティアが自由な発想で活動内容を考える「SIAFたんけん隊(何かやり隊)」。6回のミーティングを重ね、以下の4つが誕生した。

- ① SIAF コンシェルジュ：北専プラザ佐野ビル会場での案内や作品解説
- ② バリア情報まなび隊：会場内や、最寄駅から会場までのバリア情報を調べ、ボランティア向けウェブサイト「ボランティアポータル」で発信
- ③ ボランティア学生部：学生対象のボランティア説明会の実施
- ④ 今日のみ〜つけた：ボランティア活動の現場等を取材し、「ボランティアポータル」で発信

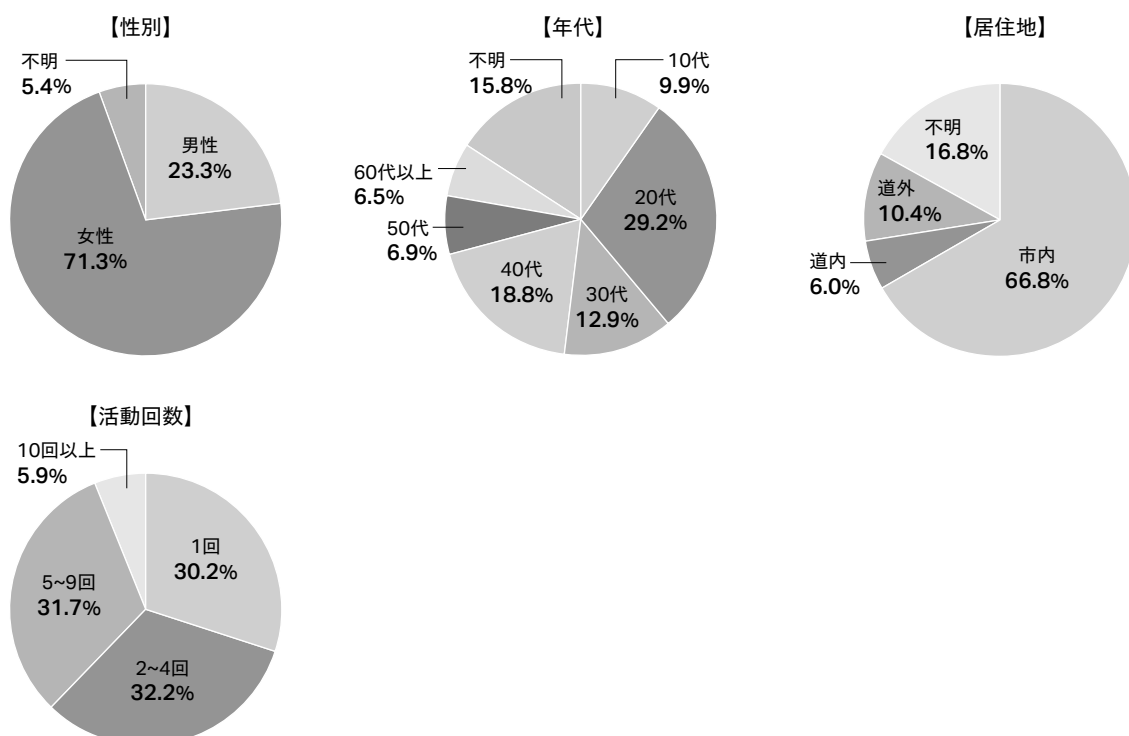
ボランティア活動参加者の構成

登録者・活動者ともに、女性が約70%、男性が約25%で、年代別では、20代が最も多く約30%だったが、30代、40代の参加も多かった。道外からの参加は、大学の研修の受け入れによるものもあった。活動回数は、約70%が複数回参加した。

●登録人数：356人



●会期中の活動人数:202人



●活動参加延べ人数:852人

内訳

《点 音》ガイド／札幌芸術の森野外美術館	6人
《長征ーすべての山に登れ》作品制作補助／モエレ沼公園	13人
《(with) without records》作品制作補助／モエレ沼公園	18人
札幌デザイン開拓使 サッポロ発のグラフィックデザイン～栗谷川健一から初音ミクまで～ 作品解説・ガイド／JRタワープラニスホール	67人
館内全体ガイド／札幌市資料館	45人
SIAF CAMP SITE PROJECT『裏庭』作品制作補助／札幌市資料館	7人
《わからないものたち》、《りんご》作品制作補助／金市館ビル、りんご	52人
北海道立三岸好太郎美術館 開館50周年記念 特別展 大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音＋三岸好太郎ワークス 飛び出す事ハ自由ダ 作品制作補助／mima 北海道立三岸好太郎美術館	4人
コタンベッププロジェクトイベントサポート／円山公園	21人
中崎透×札幌×スキー「シュプールを追いかけて」 作品制作補助／札幌大通地下ギャラリー 500m美術館	88人
狸小路TV イベントサポート／狸小路商店街	2人
市電プロジェクト(市電放送局 JOSIAF) イベントサポート／札幌市電	17人
「Rest In Peace, Sapporo ～ひかりの街をはしる星屑～」制作補助	309人
「大風呂敷プロジェクト」イベントサポート(大風呂敷を敷く、畳む)／札幌市北3条広場(アカプラ)、モエレ沼公園	38人
アジア・ミーティング・フェスティバル2017札幌スペシャル イベントサポート／札幌芸術の森大練習室	6人
会場連絡バスの集合場所での案内／JR札幌駅北口「鐘の広場」	2人
SIAF たんけん隊(何かやり隊)	157人
合計	852人

アンケート結果

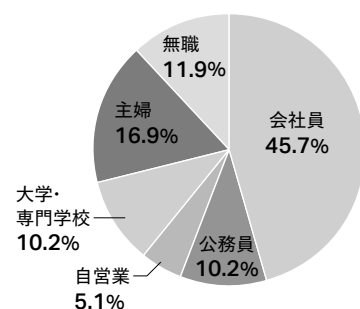
閉幕後にボランティア登録者へのアンケート調査を実施。

回答者数59人【内訳:活動参加者40人(67.8%)、不参加者19人(32.2%)】

参加者・不参加者からの回答

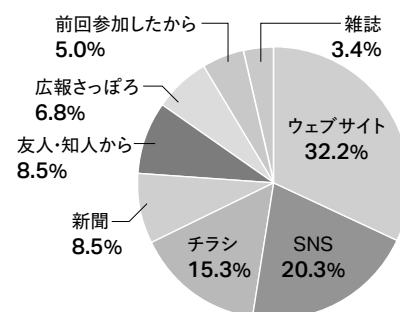
【職業】

働いている人が61.1%



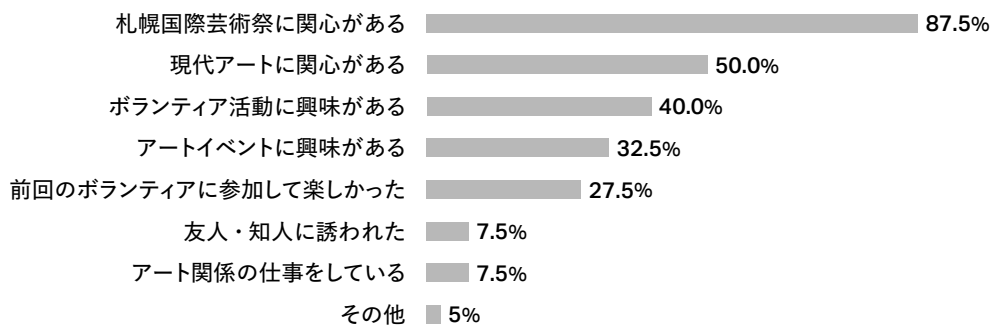
【ボランティアを知ったきっかけ】

「ウェブサイト」+「SNS」が約半数



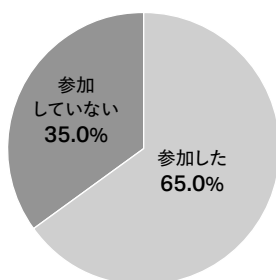
以下、参加者からの回答

【ボランティア参加の理由】(複数回答可)

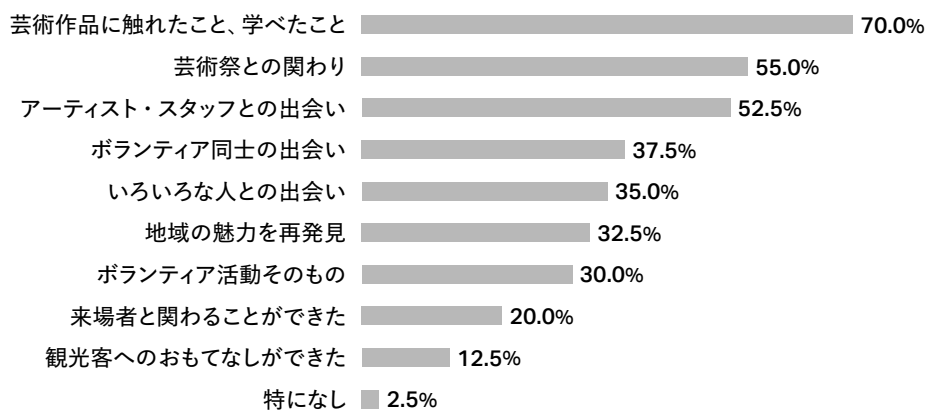


【前回(SIAF2014)のボランティア経験】

前回のボランティア参加者が65%

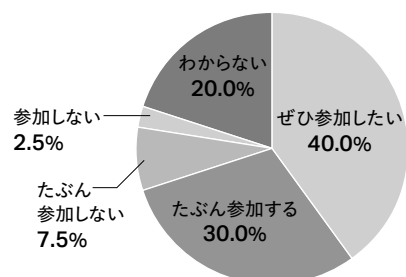


【参加してよかったこと】(複数回答可)



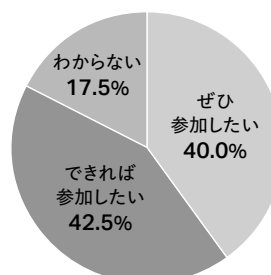
【次回の芸術祭のボランティアに参加したいか】

「ぜひ参加したい」+「たぶん参加する」が70%



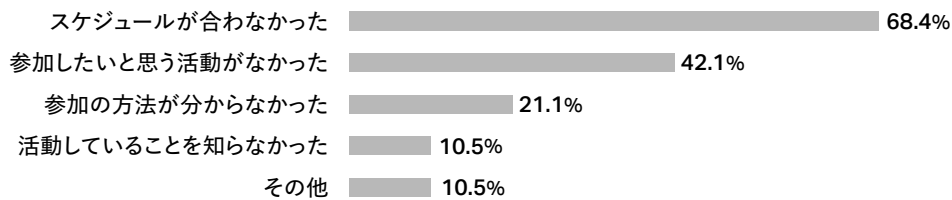
【今後、芸術祭のボランティアに関するワークショップに参加したいか】

「ぜひ参加したい」+「できれば参加したい」が82.5%



不参加者からの回答

【ボランティア活動に参加しなかった理由】(複数回答可)



参加者・不参加者からの回答

【次回どのようなボランティア活動があればよいか】

参加者からは、「作品制作補助」の希望が最も多く、次に「作品解説・ガイドボランティア」、「会場運営(チケットのもぎり・作品監視など)」の順で、不参加者からは「会場運営(チケットのもぎり・作品監視など)」の希望が最も多く、次に「作品解説・ガイドボランティア」であった。

	合計(59人)	参加(40人)	不参加(19人)
作品制作補助	52.5%	67.5%	21.1%
作品解説・ガイドボランティア	52.5%	57.5%	42.1%
会場運営(チケットのもぎり・作品監視など)	52.5%	47.5%	63.2%
芸術祭に関連する自発的な活動	33.9%	45.0%	10.5%
活動内容にかかわらず参加しない	3.4%	5.0%	0.0%
その他	5.1%	5.0%	5.3%

参加者・不参加者からの回答

○自由意見

- ・ ボランティア同士の交流や、作品を見たり、作家から解説を受けたりすることができて楽しめた。
- ・ アーティストやゲストディレクターと関わることがよかった。
- ・ 今回の芸術祭だけにとどまらない事後的な活動があるとよい。
- ・ ボランティア初心者には、単純な仕事や作業の方が関わりやすい。
- ・ 前回作品監視で長時間参加したこともあり大変だったが、来場者とのふれあいやボランティア同士の交流などもありとても有意義だった。今回はとても楽しかったが、ほとんど交流などがなく残念。
- ・ 「国際芸術祭」の言葉にひかれてボランティア登録をしたが、具体的な活動内容が分からず、送られてくる情報は関心の薄いものだった。
- ・ ボランティア活動ができる場所が少なかった。
- ・ ボランティア募集の内容、時期があいまいだった。
- ・ ボランティアの参加可能な日程と活動が一覧で見られると、参加しやすかった。
- ・ 募集告知が直前すぎて、予定が立てにくかった。
- ・ インターネットでの申し込みや情報収集に苦労した。あまりインターネットに慣れていない人は活動しにくかった。
- ・ ボランティアに何を求めているのか見えにくかった。

- ・ 親しい仲間内で盛り上がっているようで、一歩引いてしまった。初めての人が参加しやすい雰囲気づくりも重要。
- ・ 遠い活動場所や早朝の活動は、参加しにくい。
- ・ アルバイトスタッフの方が何かと優遇されていた点に不満を感じた。
- ・ 交通費など、もう少し援助があるとやりがいがあった。
- ・ 統一したユニホームがあると連帯感が生まれてよい。

6 関係団体(観光、ホテル、ハイヤー)からのヒアリング

SIAF2017開催にあたってPR協力をいただいた関係団体などからご意見を伺った。SIAFのPRの点からは、目玉となる作品で関心を引くなどの来場を促す仕組みが必要という意見や、インバウンドを取り込むには、ターゲットを明確にして、関係団体に早期の情報提供と働きかけが必要などの意見があった。

公益社団法人 北海道観光振興機構

北海道観光振興機構が首都圏で開催する北海道ブロック記者発表会(首都圏の観光・旅行系メディア向け。奇数月に開催)に参加し、PRを実施(2016年11月 SIAFブースの設置、2017年5月 プレゼンテーションとブースの設置)。また、毎回の同記者発表会の際に、SIAFのチラシ配架などのさまざまなPR協力をいただいた。

そのほか、夢大地北海道ガイドタクシー※の乗務員を対象に、SIAF2017の概要とモエレ沼公園についての研修を行った(2017年6月)。

※観光知識や接客マナーに関する専門的な研修を受け、認定試験に合格し、観光客のニーズに応えられる「観光知識」と「おもてなしの心」を備えたタクシー乗務員が運転する観光タクシー。事務局は北海道観光振興機構。

《意見》

○PRについて

- ・北海道ブロックの記者発表会の結果、SIAFのことが雑誌に掲載されたり、あるいは、掲載予定のものがさらに補強されたりと、記者発表会実施の結果がさまざまな部分で影響あったことは成果。また、2017年5月の記者発表会での札幌ブースは、SIAFのポスターやチラシでカラフルに彩られ、大変目立つデザインで注目を集めた。
- ・分かりやすく目玉となる作品があった方がよいのではないかな。親しみやすい作品をきっかけに、アートに興味を持ってもらうという仕掛けが必要。

○インバウンドの取り組み

- ・ターゲットを絞ることが必要。例えばアジアであれば、芸術関係に興味のある層が多いシンガポール、香港など。また、欧米(特にヨーロッパ)に重点を置いた方が、SIAFに興味を持ってくれる可能性は高い。
- ・インバウンドの情報提供は、全てを紙媒体ではなく、主要場所にはWi-Fiがあるため、ウェブやアプリの活用などが必要。
- ・地図は、芸術祭会場と周辺情報(食や観光)をセットで見せられると効果的。

○SIAF2017について

- ・アートを見せつつ、会場となっている観光地や建築物などもアピールしていた点はよかったのではないかな。

○夢大地北海道ガイドタクシー乗務員への研修について

- ・SIAFの観覧希望は1件。SIAFの研修を受けた乗務員を斡旋した。
- ・研修は全体としてはよい内容であったと思うが、芸術祭自体については内容が難しいという意見があった。「SIAFでは、これが見られる!これがおすすめ!」というような具体的な作品情報がまとまっているものがあるとよかった。例えば、ガイドブックの該当部分を乗務員に配るだけでも相当効果的だったのではないかな。

札幌市内ホテル連絡協議会

加盟ホテルでのSIAF2017チラシ配架のご協力

《意見》

○PRについて

- ・ ホテルフロント周辺のデスクにSIAFのチラシを配架し、来館者に手に取ってもらっていたが、芸術祭が札幌に人を呼び寄せる効果があったかどうかは分からなかった。
- ・ 市民の認知度が低いと感じる。呼び込むための仕組みが必要ではないか。
- ・ 3年に一度の事業なので、忘れられないように継続的な活動があるとよい。

○インバウンドの取り込み

- ・ ターゲットを明確にすることは重要。国によって何に興味があるかは大きく異なる。
- ・ 旅行泊の中にSIAFを組み込めるかどうか、特にインバウンド対策としては重要であり、開催1～2年前に各種旅行業界への働きかけが必要である。そのときに基本的な情報は出せるようにした方がよい。
- ・ SIAFが、インバウンドの札幌での宿泊日数の増加に貢献する新たなコンテンツとなることを期待。

札幌ホテル旅館協同組合

加盟ホテル、旅館でのSIAF2017チラシ配架のご協力

《意見》

○PRについて

- ・ 芸術祭事務局から加盟ホテル、旅館にSIAF2017鑑賞ガイドが配布された点はよかった。
- ・ 加盟ホテル、旅館から組合への問い合わせや反響は特段なかった。
- ・ 市民の認知度はどの程度なのか。SIAFの開催自体を知らない人が多かったのではないか。
- ・ 目玉になる作品があった方がよい。興味を持っていない人も取り込んでいかなければ、SIAFに興味を持つ人が広がっていかない。
- ・ 会場でどのような展示が見られるか事前に分かったと来場しやすいと思う。
- ・ SIAFの中に観光要素があってもよいと思う。体験しつつ、芸術を楽しめるとよい。

○インバウンドの取り込み

- ・ 外国人観光客に向けての情報を発信するために、SNSをうまく活用するとよいのではないか。

一般社団法人 札幌ハイヤー協会

協会加盟会社の業務車両にSIAF2017のPRステッカー貼付のご協力(2017年7月～10月1日まで)

《意見》

○PRについて

- ・ 約9割のタクシーにステッカーを貼った。
- ・ 加盟会社や乗務員から協会には、SIAFについての問い合わせは特段なかった。
- ・ 乗務員にSIAFのパンフレットなどを配布すると有効かもしれない。
- ・ 市民のSIAFの認知度は、まだ低いように感じた。

7 総括

SIAF2017では、テーマ「芸術祭ってなんだ?」、サブテーマ「ガラクタの星座たち」を表現するべく、従来の美術の文脈に収まらない「音楽と美術のあいだ」にある幅広いジャンルの展示や、大小さまざまなイベントの実施により、会期57日間にわたり、札幌市内各所で即興性、偶発性を伴う動きのある芸術祭を実現した。このような芸術祭について、有識者からは全体を通してテーマへの一貫性があることや、その独自性が評価されたほか、来場者からは芸術祭を楽しんだという声が聞かれた。

また、今回の芸術祭では市民参加を重視し、SIAF 公式プログラムの一つとして実施する事業を個人や団体から公募したことや、大風呂敷プロジェクトやさっぽろコレクティブ・オーケストラに象徴される参加型プロジェクト、数々のワークショップなどを実施したことで、何度も繰り返しイベントに参加し、一緒に SIAF2017をつくるファンが生まれたことも特徴的であった。

このように積極的な市民参加があった一方で、来場者や有識者の一部からは、「内輪感が強い」「地域に親しみのあるものであったことは評価するが、外部には十分に開かれていなかったようだ」といった感想も挙げられた。また、SIAF 自体の認知度の低さやPR不足といった指摘もあり、SIAF への関心が高い層と低い層の二極化が見られ、市民への広がりや十分ではなかったことは否めない。

次回に向けて、より多くの人に興味関心を持ってもらうための手法、来場促進につながるPRについて、外部意見も聞きながら効果的な方法を検討していきたい。

加えて、展示・イベントの内容や会場やチケット情報などの基本的な情報を分かりやすく提供できなかったこと、SNSによる情報提供に偏りがちになってしまったことも課題として挙げられる。来場者からは、知りたい情報が見つけれず来場意欲が低下したといった声もあり、このようなことが、SIAF に関心はあるものの来場に結びつけることができなかつた一因と考えられることから、情報提供のあり方の改善が必要である。

今回の会場については、モエレ沼公園、札幌芸術の森、円山動物園などの市有施設のほか、北海道大学総合博物館、mima 北海道立三好太郎美術館などの文化施設、中心部にある雑居ビルなど市内44カ所に点在した。会場を巡りながら札幌の街を楽しんでもらうというねらいもあり、スタンプラリーも実施した。

この点については、来場者からは「観光では行かない場所に行くことができた」、「札幌の魅力を再発見した」といった感想があった。しかし、残念ながら、分散したことへの不満の声も多く聞かれた。特に市外からの来場者にとっては、限られた時間の中で観覧会場の選択をしなければならなくなってしまった。この点については有識者からも課題として指摘されている。また、街中の会場については「場所が分かりにくい」という意見が多く寄せられた。

市内を巡る会場設定は周遊観光へつながる可能性があることから、引き続き、札幌の魅力を再発見・再認識できる既存施設や地域資源の活用を考えていくとともに、会場への案内や誘導、周遊の仕組みについて、来場者目線に立ち検討していく。

国際性の点については、来場者アンケートからは「国際的な感じが伝わらなかった」という意見、有識者からは、非常にローカルな地方イベントに参加している気分になる、より多くの海外アーティストを迎えるべきという意見や外国人向けの情報提供や案内(多言語対応)の不足について指摘があり、国際展としての SIAF のあり方の再考が求められている。

最後に、ボランティアについては、今回は、ボランティア活動の仕組みを市民と一緒に考えていく「ボランティアプロジェクト」を立ち上げた。その結果、参加者による自発的な活動が生まれるなどの成果も見られた。一方で、ボランティアに登録した方のうち約4割は活動参加に至らなかったことから、登録した方が参加しやすい仕組みや活動内容の再検討が必要である。

以上、SIAF2017は、独自性の発揮や市民参加の促進を図ることができ、コアなファンも生まれた。また、会場使用や広報PRなどにおいて企業や団体の協力を得ることができた。

一方で、より多くの市民への浸透、会場の配置、分かりやすい情報提供、国際展としてのあり方などといった課題も見えた。

次回に向けては、今回の成果を引き継ぎつつ、このような課題の解決を図りながら、札幌ならではの企画や、幅広い市民の関心・参加を得る企画・運営を実施していきたい。

札幌国際芸術祭 2017 事業評価報告書

平成30年(2018年)3月発行

札幌国際芸術祭実行委員会事務局

(札幌市市民文化局国際芸術祭担当部)

TEL: 011-211-2314 FAX: 011-218-5154 E-mail: info@siaf.jp